

松本市出川南遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1987.3

松本市教育委員会

松本市出川南遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1987. 3

松本市教育委員会

序

南松本周辺は現在では工場・住宅等が立ち並び、市内でも流通産業の中心地として栄えて参りました。ここは以前より開発工事の際に古代の遺物を出土する所として知られておりました。この度奇しくも松本市でこの地区に市営住宅を建設する事となり、急遽調査体制を整え発掘調査を実施致しました。調査は5月20日から約1ヶ月にわたり行なわれ、その結果弥生時代から平安時代までの住居址と多数の遺物を調査することができました。昨年はこの北側出川遺跡においても同様に調査がなされており、今回の成果と合わせ、地域の歴史解明の一助となるものと信じております。

昭和62年3月

松本市教育委員会 中島 俊彦
教 育 長

例　　言

1. 本書は昭和61年5月20日より6月25日にわたり実施された出川南遺跡の緊急発掘に関する報告書である。
2. 本調査は松本市市営住宅建設に伴なうもので、松本市教育委員会が行なったものである。
3. 本書の執筆は第1章 事務局、第2章第1・2節 太田守夫、同第3節、第3章第3節2、第4章 木下守、第3章第3節1 直井雅尚、その他の項目は高桑俊雄が行なった。
4. 本書作成に関する作業分担は次のとおりである。

遺構図トレース：石合英子、高桑俊雄

遺物・図整理：丸山恵子

遺物実測・トレース：三村竜一、直井雅尚（土器）、高桑俊雄（土製品・石器等）、赤羽包子、木下守（鉄器）

写真撮影：岩瀬世紀

一覧表作成：直井雅尚（土器）、乾靖子（土製品・鉄器等）

5. 本書の編集は事務局が行なった。

6. 出土遺物及び図類は松本市立考古博物館が保管している。

目 次

第1章 調査経過	2
第1節 事業経緯	2
第2節 調査体制	2
第3節 作業日誌	3
第2章 遺跡の環境	5
第1節 調査地の位置	5
第2節 地形と地質	5
1. 遺跡の地形	5
2. 遺跡の堆積層	7
3. 遺跡の立地	8
第3節 周辺遺跡	10
第3章 調査結果	12
第1節 調査の概要	12
第2節 遺構	14
1. 住居址	14
第1号住居址	14
第4号住居址	18
第2号住居址	15
第5号住居址	19
第3号住居址	16
2. 竪穴状遺構・土壙・建物址	21
1) 竪穴状遺構	21
2) 土壙	21
3) 建物址	21
3. 溝	23
第3節 遺物	24
1. 土器	24
2. 鉄器	25
3. 土製品・石器	26
第4章 調査のまとめ	43

第1章 調査経過

第1節 事業経緯

松本市並柳（出川町と芳川平田の境にあるが、並柳の飛地のため）に所在する工場跡地に市営住宅建設の計画があることを担当課より連絡をうけ、同地が出川南造路の一部であることから、事前に発掘調査を行うこととし、市単独事業として予算を計上して、教育委員会が調査を行うこととしたものである。

第2節 調査体制

調査団長 中島俊彦（松本市教育委員会教育長）

調査担当者 神沢昌二郎（松本市立考古博物館長）

現場担当者 高桑俊雄（社会教育課）

木下守（社会教育課）

調査員 太田守夫（地質）

竹原学

三村竜一

協力者 赤羽喜平 大谷成嘉 佐々木謙司 中島新嗣 丸山愛徳

青木雅志 奥原富蔵 清水滋 直井スガ子 村山正人

五十嵐周子 開鷗八重子 鶴川登 原田美春 行武瑞恵

石合英子 川上靖枝 土肥泰子 古畠昭夫 横山倍七

石松清美 黒岩隆 中野芳治 丸山恵子 鶴三智恵

稻垣博子 小林雅子 中野久子 丸山誠

事務局 浜憲幸（社会教育課長）

岩瀬世紀（文化係長）

熊谷康治（主事）

直井雅尚（主事）

第3節 作業日誌

昭和61年5月20日 火 雨 作業開始。市教委と建築課、マツモク担当者と現地打合せ。市教委
：高桑（以下市教委同様）

5月21日 水 曜 重機による試掘開始。午後予定地測量（概略）夕方小雨あり。作業員：瀬川他
4名。

5月23日 金 晴 重機により南地区より削平開始。約1mを除去。

5月24日 土 晴 重機北地区へ入るが工業用廃棄物の穴あり悪臭漂よう。

5月27日 火 晴 作業員による検出作業開始。北地区中央やや南西寄りで出水あり。南地区東端
の試掘。作業員：佐々木他19名。

5月28日 水 晴 重機による北地区第一面終了するが南、北地区更に80m掘り下げが必要と判明。
北地区は更に30~40cm掘り下げる。作業員：佐々木他16名。

5月29日 木 曜 作業員休み。重機稼動。昼より雨降り。作業員：佐々木他2名。

5月30日 金 雨時々曇 南地区第一検出面より重機で20~25cm掘り下げる。灰釉陶器、土師内黒
境、鉄塊等出土。作業員：佐々木

5月31日 土 晴 南地区で建物址1溝1, 3を検出。朝から北地区検出作業開始。昨日の南地
区削平で両地区同じ面となつたらしい。作業員：佐々木他9名。

6月2日 月 晴 南地区北東部1住、溝3掘り下げ開始。第二面検出作業開始。作業員：佐々木
他22名。

6月3日 火 曜 1住掘込継続。北地区3住溝2検出、掘込作業開始。作業員：佐々木他22名。

6月4日 水 曜 1住遺物出土図作成。南地区全体図作成中。測量の為作業員休み。作業員：佐
々木他4名。

6月5日 木 晴 1住遺物取り上げ。溝1部分から東寄り削平検出作業。溝1平面図作成。南地
区平面図作成。北地区測量開始。作業員：佐々木他7名

6月6日 金 曜 1住周囲を拡張。溝1, 3土層図作成。3住拡張するが南側ゴミ穴の為不明。
溝2土層図作成。北地区第一面平面図、遺物出土図作成。南地区を更に削平するが遺物は
ない。作業員：佐々木他8名。

6月7日 土 曜 (朝雨あり) 作業員中止。2住上層図作成。重機は北地区を弥生層迄落す。遺物
は中央部から東に多い。作業員：佐々木他4名。

6月9日 月 晴 1住北側拡張作業難行。2住掘込作業。同床面検出、同平面図作成、遺物取り
上げ。3住掘込作業、床面検出。4住検出作業開始。南地区第二面平面図作成。調査員：
竹原学、作業員：佐々木他15名。

- 6月10日 火 晴 1住北、東へ拡張作業。2住床面調査。3住土層図作成、同床面検出。4住検出作業継続。南地区西側より漸次検出作業。市教委：木下加わる（以下市教委同様）調査員：三村竜一（以下調査員同様）作業員：佐々木他18名。
- 6月11日 水 晴 1住掘込継続。2住遺物バインダー処理、取り上げ。5住検出、掘込開始。作業員：佐々木他17名。
- 6月12日 木 晴 1住掘込継続。2住ピット検出、半割。3住遺物取り上げ。5住掘込継続。豎穴状遺構1、2掘込開始（遺物は周囲の茶褐色土より出土）。調査員：太田守夫 作業員：佐々木他16名。
- 6月13日 金 晴 2住ピット土層図作成、同掘り上げ後平面図作成。3住ピット平面図、遺物取り上げ。5住土層図作成。豎穴状遺構1土層図作成。南地区測量釘打ち。作業員：佐々木他14名。
- 6月14日 土 曇 1住写真撮影。5住平面図作成、同写真撮影。南地区第二面全体図作成中。作業員：佐々木他20名。
- 6月16日 月 曇 1住プラン検出作業（縁部分を追う）。4住掘込開始。豎穴状遺構1、2掘込継続、写真撮影、土層図作成。南地区第二面遺物取り上げ。雨の為午後4時作業中止。作業員：佐々木他20名。
- 6月17日 火 雨 雨の為作業中止。
- 6月18日 水 曇後晴 1住南、東側を確認。4住床面検出（ベルトは未だ残す）。南・北地区第二面検出、全体図作成中。作業員：佐々木他5名。
- 6月19日 木 曇 1住想定プラン写真撮影。3住カマド土層図作成。4住掘込継続中、同土層図作成。建物址1土層図、同平面図作成。豎穴状遺構3土層図作成。南、北地区全体図作成。作業員：佐々木他20名。
- 6月20日 金 曇時々晴 1住カマド土層図作成。一部片付け作業開始。4住遺物取り上げ、同写真撮影、同ピット平面図作成。豎穴状遺構3掘り下げ継続。土壌1より遺物出土、土層図作成。南地区平面図レベル入れ。作業員：佐々木他13名。
- 6月21日 土 曇時々雨 4住床面精査、平面図作成、遺物取り上げ、柱穴掘下げ、炉小割、写真撮影、ピット土層図作成。豎穴状遺構3土層図、平面図作成。南地区第二面レベル入れ。作業員：佐々木他9名。
- 6月23日 月 曇時々雨 4住床面、壁際精査。
- 6月24日 火 曇時々雨 基準杭、測量を終了。松本木工へ挨拶。
- 6月25日 水 曇後雨 道具、資材撤去。埋構遺跡へ運搬。作業員：佐々木他2名。
- 11月17日 月 曇 本日より報告書作成に向けて、次の作業を順次行っている。遺物洗浄、注記、復元、整理、拓影、実測、トレース、図版整理、原稿執筆、校正等。

第2章 遺跡の環境

第1節 調査地の位置

本調査地は松本市のやや南寄り、芳川平田地籍北端に位置する。東は県道平田・新橋線を狭み約150m地点を田川が北流する。田川は塩尻峠に源を発し奈良井川へと流れ込む。また牛伏川が東部山地の高ボッチと鉢伏山の谷間より牛伏寺の南を抜け、寿地区を貢流し本調査地の北東約450m地点で田川に合流する。西は約1kmで国道19号線を越え、約2.5km地点を奈良井川が北流する。東方を望めば中山丘陵が南から北へと伸びて、その北端に弘法山古墳を見る事ができる。又、北側には住宅、工場等が立ち並び、すでに自然地形の観察は困難となっている。

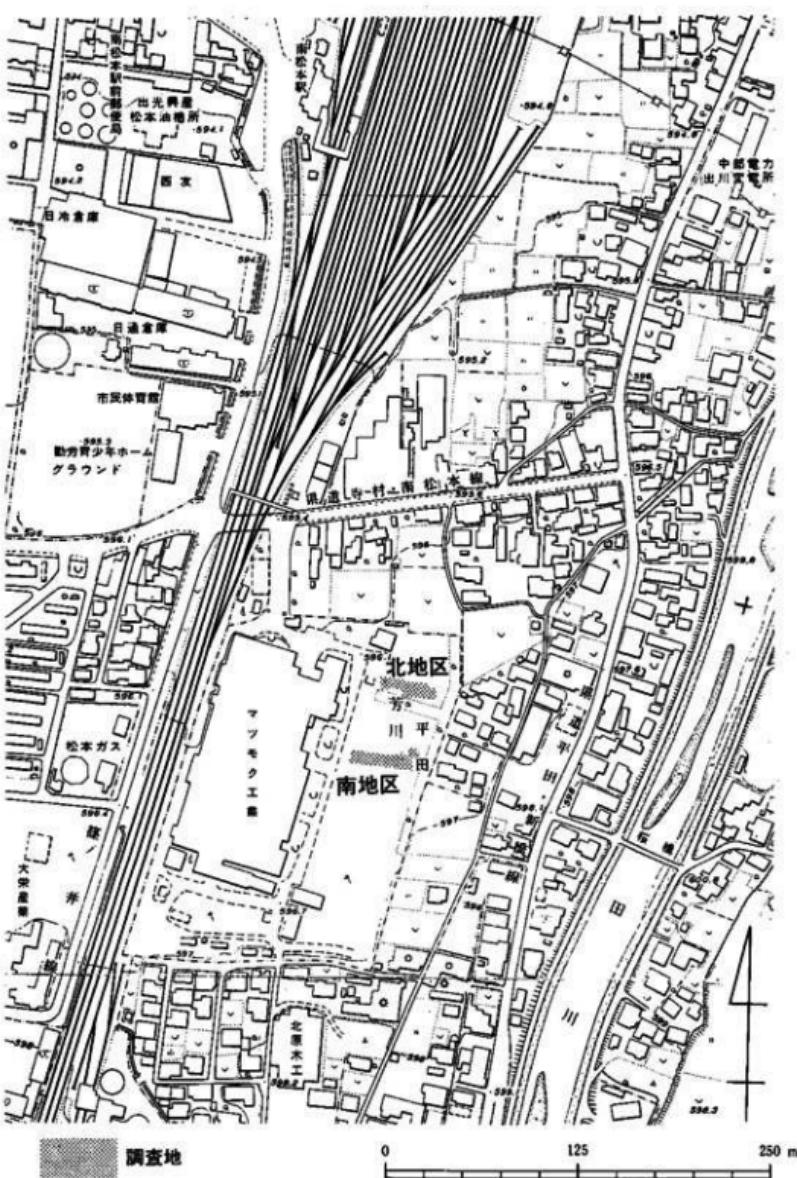
図1により調査地付近をみると西にはマツモク工業の工場が隣接し、工場西脇を国鉄篠ノ井線が南北に走る。北は県道寺村・南松本線を狭み直線距離にして約300m地点に南松本駅がある。今回調査したのはマツモク工業グランドの跡地でその北半分にあたり、市営住宅が建築される2地点のみである。この2地点をそれぞれ北地区、南地区とし実施した。両地区的間とグランドの周囲には桜の木が多く植えられ従業員の憩いの場所となっていた。なお標高は596mで調査地真西の田川の河床下約4mにある。周辺は南より北へ向いごく緩やかに傾斜している。南・東には住宅地が隣接し、北は狭いながらも畠地として利用されている。

第2節 地形と地質

1 遺跡の地形

本遺跡は村井高畠遺跡（上流約1.9km）とは同じ田川の左岸にあって、たびたび氾濫の被害を受け、堆積環境が似ている。高畠遺跡付近で遺跡面と同じ高さであった田川の河床面は、芳川平田、出川町付近では堤防に囲まれ天井川となっている。以前は土手程度の堤防であったためたびたびの増水で破堤したことが記録に残されている。また牛伏川の氾濫は田川の右岸を埋めたため破堤は左岸に集中し、芳川平田地籍であふれた流れは遺跡まで及んでいる。このことについては次の項で詳しく述べるが、調査地の堆積に乱流の状況が観察され複雑であった。

また西方の奈良井川では国鉄篠ノ井線の西まで氾濫原の堆積がせまっている。一方東方の牛伏川の扇状地の末端にも当り、地形的には出川町や南松本駅構内に続く凹地帯ともなっている。このこ



第1図 調査地の位置

とは地下水の等深線にもよくあらわれ、出川町や南松本駅構内より遺跡の方向へ深く湧入してきている。夏・冬の等深線はそれぞれ590m・585mである。付近の地下水位は4.5mが報告されているが、500~700m 北方では扇状地末端に当り、地下水が高く湧水もみられる。

2 遺跡の堆積層

発掘地付近は、古くは桑畠以後普通畑で、昭和30年以降に地下揚水によって開田された場所もあったが、現在はほとんど宅地化している。また発掘地の表土や一部の深部では、掘返されている。これに前述の氾濫などによる乱流を合せると、発掘地の地層は一定せず把握しにくい。

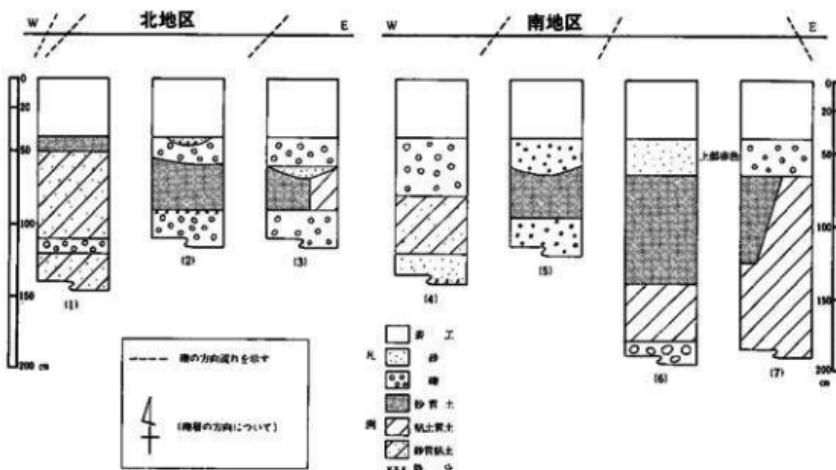
調査区はおよそ10×50m の南北2地区で代表的な地層断面をあげると第2図のようになっている。氾濫や乱流によって複雑となっているが、整理してみると次のような堆積の傾向性がみられる。

1. 表土は作土あるいはグランド用地として搅拌されている。
2. 表土下の砂礫層から以下は自然堆積層で、第一礫層は礫・細礫・砂の違いはあるが、層厚から見て時間的に大きな違いはない、同時異相と考えられる。
3. 第一礫層と第二礫層との間は一般に砂質土で、東へ移るに従い粘土質を増し、南・北地区とも東壁付近は厚い粘土質土となっている。
4. 粘土質土の下層(180cm)に大礫を含む礫層が一ヶ所発見されたが、これは第三礫層と考えられるが、他の地下層に存在するか確認できない(6)。
5. 以上からみると、調査区の西5分の4と東5分の1とは、堆積環境が違っていると考えられる。もちろん氾濫や乱流の堆積であるから一概にはいえないが、第三礫層・粘土質土の堆積があったと思われる。
6. 前述のように第一礫層と砂質土は共通した堆積とみられる。

礫層の礫種は砂岩・砂岩のホルンフェルスが主で、砂質けつ岩、砂質けつ岩ホルンフェルス、石英閃緑岩、チャートが混入し、形は亜円礫・円礫である。礫の大きさは高畠遺跡より小さくなり、径の最大は20×10cmの大礫、5×5cm前後の中礫、2×3cm前後の小礫及び細礫で、小中細礫が圧倒的に多い。径の大きいものは砂岩やそのホルンフェルスである。

次に流れを示すと思われる礫層が、北地区西隅にN-40°-E(礫を混えた細礫・幅20cm)・N-50°-E(砂を混えた細礫・幅40cm)の二筋、ほぼ中央にN-60°-E(表面に細砂の流れたあと下部に細砂、粗砂の堆積をもつ礫層、幅8.5m・厚さ20cm)南地区の西よりにN-60°-E、ほぼ中央にN-70°-E(幅100cm・(6)の上部) 東隅近くにN-20°-W(幅70cm・細礫小礫層)が発見された。

これらのうちN-60°-Eは南から北地区へ連なるものと思われる(溝1・2)。またNE-SWを示す礫層は田川の現河床と反対の方向を指しているが、過去の多くの氾濫(あるいは旧河床)が国鉄篠ノ井線沿いに推定されているので、その方向からのものと思われる。



第2図 調査区土層概略図

3 遺跡の立地

本遺跡は弥生、古墳、平安、中世各時代の複合といわれる。地形の形成を順序だててみると次のように考えられる。

1. 第三疊層の堆積
2. 粘土質土層の堆積。第三疊層と同時異相の部分も考えられる。
3. 第二疊層の堆積。砂層や砂質土の同時異相の部分も考えられる。
4. 砂質土層の堆積
5. 第一疊層の堆積
6. 表土

この中で中世の遺跡は第一疊層の堆積前、砂質土層堆積後と考えられ、弥生期の遺跡は出土状況からみて第二疊層の堆積前と考えられる。



1 北栗	10 中二子	19 苓生古墳群	28 小池	37 横山
2 南栗	11 向原	20 八幡山古墳	29 エリ穴	38 赤木
3 小島	12 上二子	21 小丸山古墳	30 松山	39 原度前
4 高宮	13 神戸	22 丸山古墳	31 若宮	40 滑水林
5 出川	14 牛の川	23 よばり塚古墳	32 吉田川西	41 赤木山
6 平田	15 弘法山古墳	24 中山古墳群	33 北原	42 高畠
7 野溝	16 榛誠山古墳群	25 百瀬	34 吉田向井	
8 本郷	17 生妻	26 白川	35 小赤	
9 下二子	18 弐生	27 野口	36 石行	

第3図 周辺遺跡

第3節 周辺遺跡

本遺跡は田川中流域の左岸に位置しており、周辺流域には田川により形成された遺跡が点在する。昭和60年度に中央自動車道長野線の工事に伴ない上流約1.5km地点の左岸、塩尻市吉田川西遺跡が長野県埋蔵文化財センターにより調査され完形の縁軸陶器7点セット（皿4・耳皿1・碗2）を出土して全国的に注目された。この遺跡では平安時代から中世における大集落址を確認しており、田川が形成する自然環境が遺跡の成立を促した格好な例といえよう。

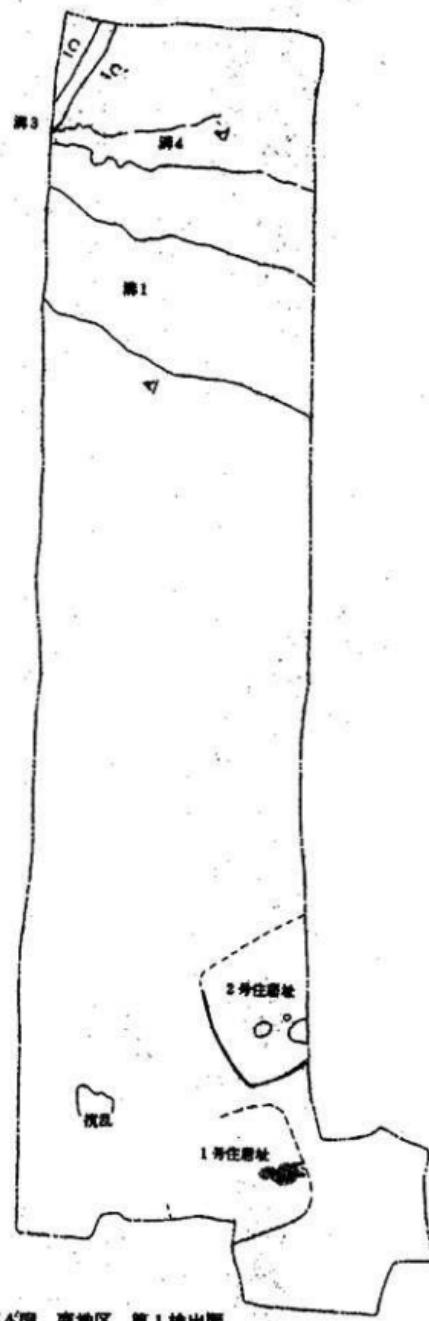
先ず田川沿辺の弥生時代の遺跡を上流から見てゆく。左岸段丘上では、棟敷から高出にかけ日向畠・北ノ原・黒崖等中期を中心とした遺跡が帶状に連なり、九里巾周辺からは奈良井川の氾濫原となるため、遺跡が殆ど見られないが、昭和57年度に塩尻市教育委員会が行った丘中学校遺跡からは大型の方形周溝墓が1基調査され、ちょっとした微高地にも注意しなくてはならない事を感じさせられた。一方右岸では棟敷から片丘に花見・犬原・上木戸と連なり松本市に入り赤木山遺跡群がある。犬原・上木戸両遺跡は昭和60年度に埋蔵文化財センターが調査を行い、前者が後期の方形周溝墓2基、後者が後期の住居址16軒を検出している。赤木山周辺の遺跡は縄文時代中期を中心とするが、その他の遺構も見られる。弥生時代では白神場遺跡に方形周溝墓3基が見られた。中下流域では本調査地より2.5km余上流寄り、寿地区の左岸に百瀬遺跡がある。この遺跡は1軒の住居址より多器種の土器を出土し、中期末の指標遺跡として知られている。また本調査地より下流側には出川・井川城等の後期の遺跡があるが、これらの地域は牛伏川、和泉川、薄川の合流地点付近にあたり一面氾濫原となっているため小規模なものである。古墳時代では北東約1.5kmに弘法山古墳を望み更にこの南側に中山古墳群が広がる。昨年実施した赤木山北麓の石行遺跡では古墳前期の住居址9軒を検出、S字状口縁の台付甕、布留式土器等を得ている。

奈良・平安時代では前述の吉田川西遺跡で270軒を越える住居址を検出し、縁軸陶器の他にも筆の穂先、輸入陶器、墨書き土器等膨大かつ貴重な遺物を出土している。以下は芳川村井地区から平田地区にかけて点在する程度である。昨年行った高畠遺跡の調査では、古墳時代後期、平安時代前・後期の住居址各1軒を検出した。

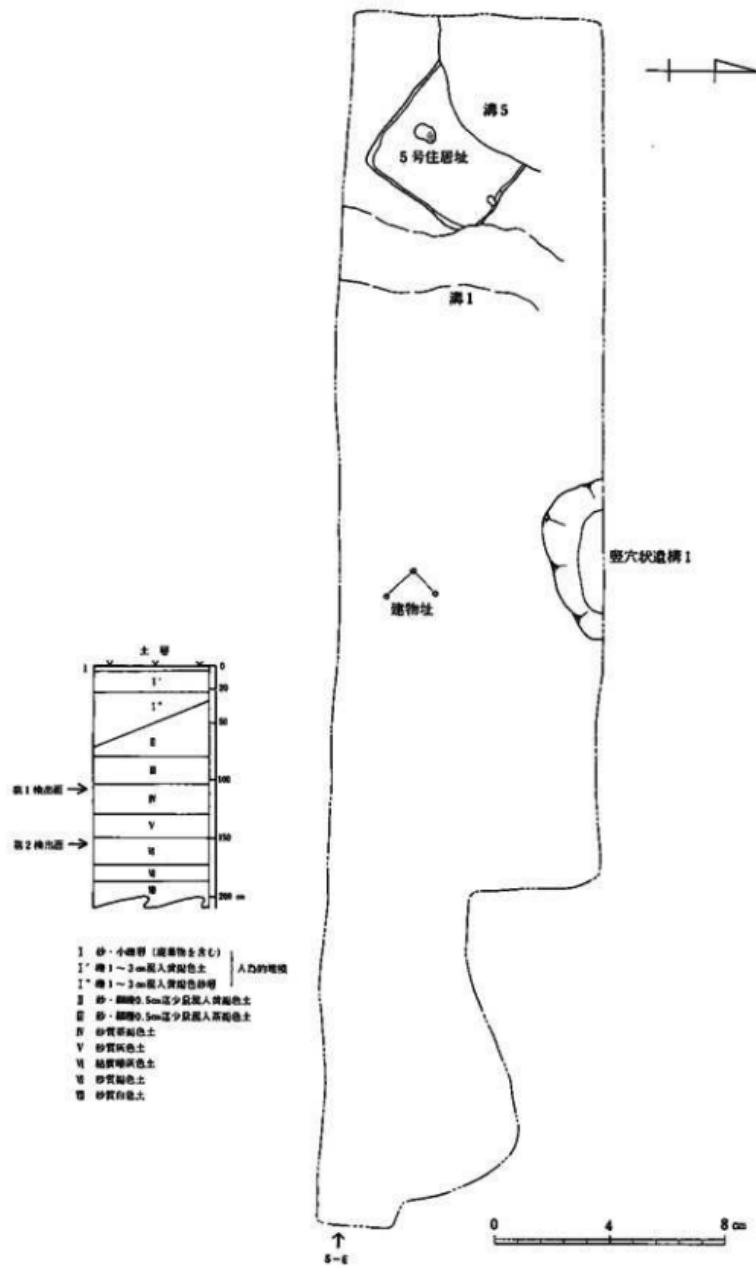
本調査地付近では南松本駅構内から東にかけての地域から遺物を得ており、その西、西友敷地内から社会福祉センターにかけては土師器の他弥生式土器も見られる。また昭和60年度に調査を行った南松本駅北西隣では、弥生時代中期末の住居址1軒、同後期の土壙1基、古墳時代前期の溝1本、平安時代前・中期の住居址3軒等を検出した。遺物としては平安時代住居址から出土した20個の土錐が注目される。

参考文献：「長野県埋蔵文化財センター年報3」1985

「塩尻市志・松本市志・塩尻市誌・第二巻・歴史上」1973



第4图 南地区 第1挖出面



第4図 南地区 第2検出面

第3章 調査結果

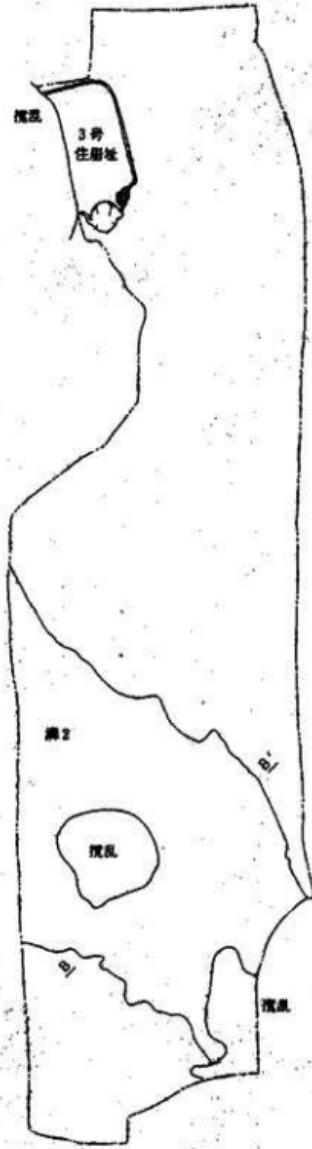
第1節 調査の概要

今回調査を行なった範囲は市営住宅の建設により実際破壊される恐れのある場所に限定した。まず予定地の大まかな測量を行ない、南地区、北地区を特定、次に両地区の間に5ヶ所、両地区の外側に1ヶ所づつ計7ヶ所試掘を行ない土層把握につとめた。その結果グランドになっていた所は砂・コークスの残炭等を敷き上部をローラーで堅くしてあるため、しまりは良いが各地点により層序は全く異なり相互を関連できず、ただ包含層まではかなり深い事だけが分かった。

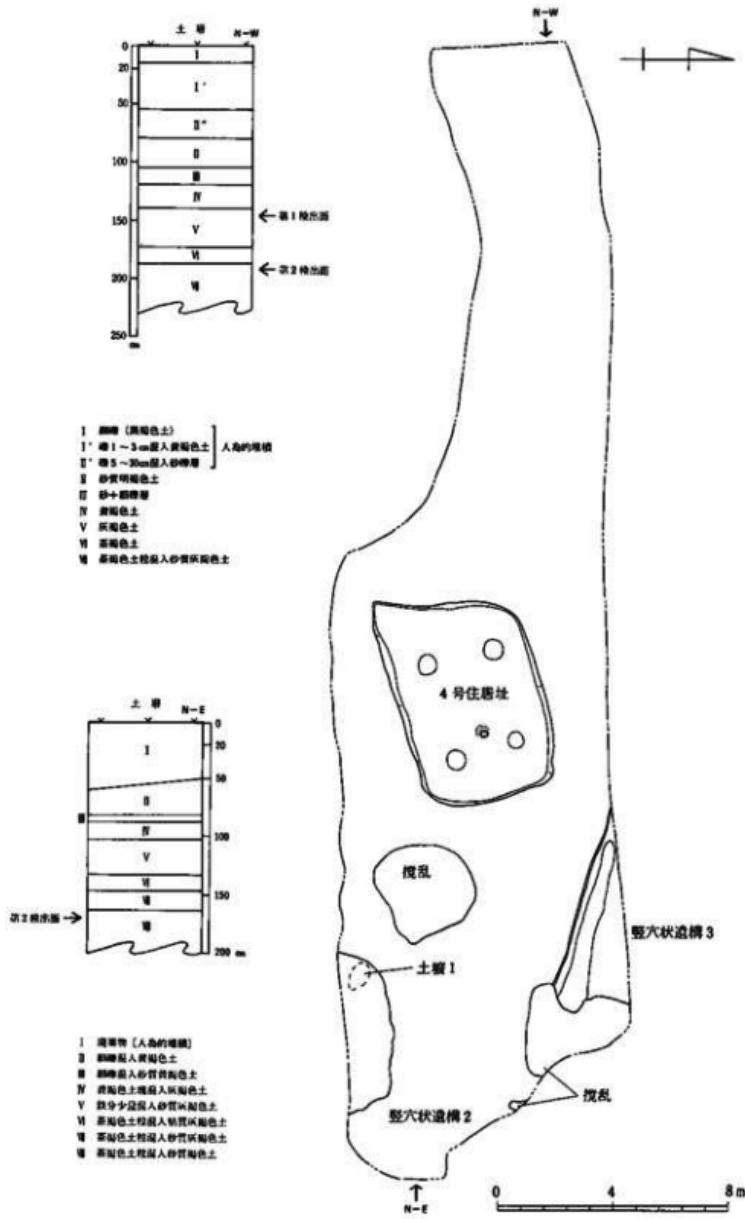
重機による検出作業は南地区より開始した。一気に80cm程下げて一旦止めたのであるが、ここでは第1面でも残る溝1と陶磁器片を少量得たのみであり、さらに30cm程下げ、ここで東側に第1、2号住居址を確認した。遺物からみてこれらは平安時代中期のものでこの面を第1検出面とした。さらに重機により30~50cm下げて西に第5住居址、中央北側に竪穴状造構1を検出することができた。両者とも古墳時代前期の造構でこの面を第2検出面としている。なお更に東端より西へ巾2m、長さ10m、深さ50cm程でトレーニングを入れてみたが遺物も皆無で砂質が強くなり、この下に生活面はないものと理解した。南地区調査面積は第1検出面410m²、第2検出面340m²、計750m²である。

北地区は南地区とは35m程離れている。南地区が砂・砂利層を頻繁に見せていたのに比べるとここは土質が良く、いたる所に工業用廃棄物が埋められその異臭がすさまじい。まず西側で土表面140cm程の所に平安時代後期の第3号住居址を検出した。これは結果的に南地区より30cm程低いレベルである。この南側は廃棄物と地下水の出水により調査不能である。さらに重機により40~50cm程削平した面を第2検出面とした。中央に第4号住居址、その北東に竪穴状造構3がありともに弥生時代後期に属する。又南東隅に竪穴状造構2(遺物なし)それに切られて土壌1(弥生時代)を検出した。このうち竪穴状造構3は東西に幅の広い溝が走りその部分に遺物が集中する。溝の北側は堅きはなく住居址の周溝というより方形周溝墓にでもなるのだろうか。なおこの東側と南側それに竪穴状造構2の上部にも大量の工業用廃棄物が埋められていた。この北地区は第1検出面295m²、第2検出面280m²計575m²である。

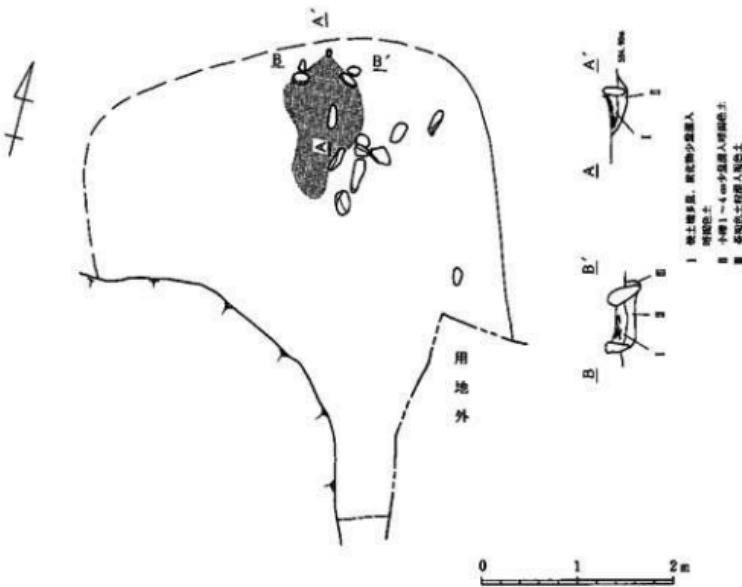
遺物としては弥生時代の壺・甕・台付甕・高杯等の土器と、土製品の勾玉・紡錘車、石器として磨製石鎌・砥石等がある。又古墳時代の遺物には甕が見られた。平安時代の遺物としては土師器の甕・壺・杯、磁器・陶器、鐵頭・刀・刀子等の鐵器、他に轆、砥石、浮子等を見る事ができる。



第5圖 北地区 第1検出面



第5圖 北地區 第2層出面



第6図 第1号住居址

第2節 遺構

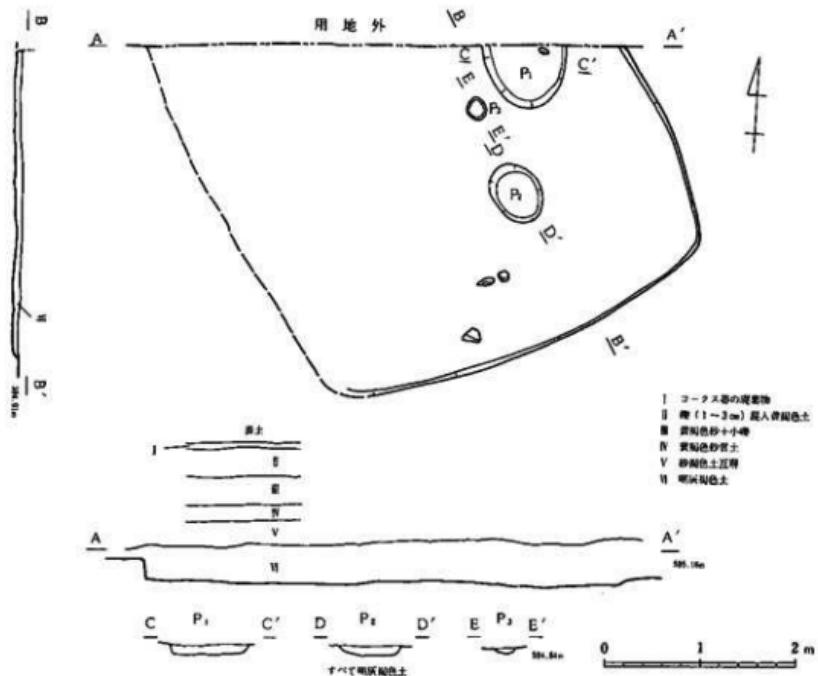
1. 住居址

第1号住居址

南地区東隅第1検出面上の遺構である。カマド部分を含め北東側には多量の遺物と大きな礫が暗褐色土中に残っていたが、南東から北西にかけては砂と小礫が上部を覆い遺物等はほとんど見ることができなかった。南側には断片的に床面を確認することができ、西側は住居址内に堆積したと思われる砂利層の範囲をして本址のプランとしてとらえた。これらから平面形は方形で規模は 4.9×4.3 m程の遺構と推測する。床面は一部であるが褐色土で堅い部分を見る事ができるが、壁の状況はかなり不明瞭である。

カマドは北側壁中央やや東に位置し、左右に2個ずつ細長い石が深く据えられた石芯カマドである。中央奥には支石が埋められて焼土は丁度この石より住居址内側へ拡がり、遺物もこの辺りに集中していた。

遺物は多く、特にカマド周辺に集中する。完形の須恵器壺が1点の他に、土師器の壺、内黒壺、甕など、灰釉陶器には碗、耳皿などを見る事ができる。これらの遺物から本址は9世紀後半の遺構と考える。



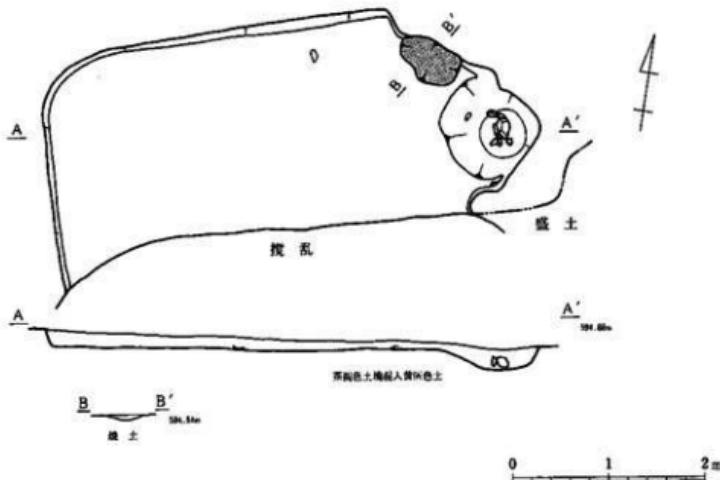
第7図 第2号住居址

第2号住居址

南地区東側第1検出面上に検出した。北半部は用地外のため未掘である。見極め難い土層であったが、周囲より若干白色の覆土で小炭化物と遺物が多く、西側は確認できた床面と土層観察点によりプランを想定した。これによると方形で規模は南西～北東4.5mを測る。床面は茶褐色塊が残る堅い所が、想定南西壁際に一部残っているのみである。壁は北西部で約20cmあるが、南～東にかけては約5cmと低く崩壊か流失か自然的影響によるものであろう。

ピットは3ヶ検出した。 P_1 ($\times 90 \times 10$ cm), P_2 ($65 \times 50 \times 10$ cm), P_3 ($24 \times 22 \times 6$ cm) と大小ですべて浅く柱穴とはなり得ない。なお焼土等カマドに関するものは全く見当らなかった。

遺物は多く2ヶのピット間床面上から出土した。生焼けの須恵器の环の他、土師器には皿、环、鉢、灰釉陶器などを見ることができる。これらの遺物から本址は10世紀後半～11世紀という時期が与えられよう。なお土器の他には板状の鐵器と鐵滓の出土もあった。



第8図 第3号住居址

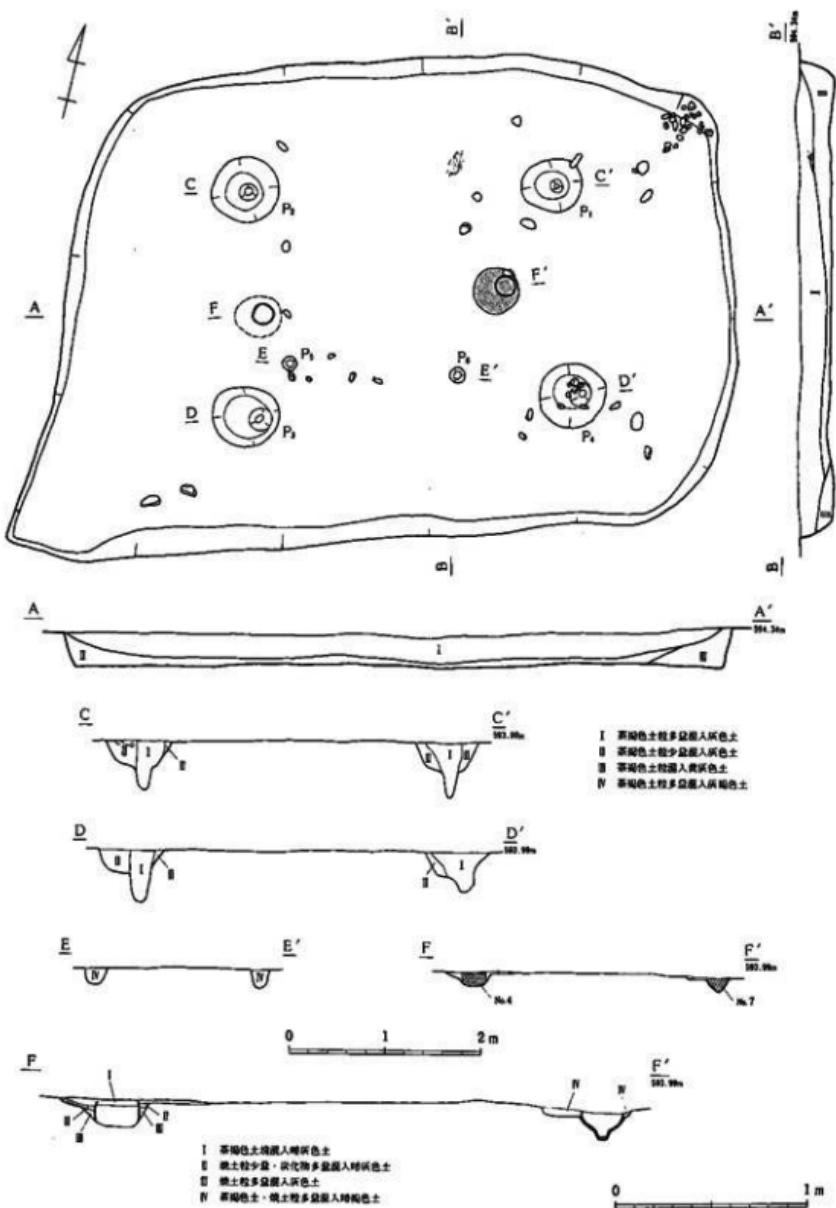
第3号住居址

北地区西側第1検出面上にある。南側には大きな穴が掘られ大量の工業用廃棄物が埋められていたため検出不能である。検出面は赤褐色を呈し一面に鉄分沈澱がみられる。覆土はやや砂質の黄灰色土で比較的明瞭な色相であった。規模は東西5.15m（ピット突出部）を測る。床面は茶褐色を呈し鉄分が沈澱したため中央から東側にかけて非常に堅く、西壁側も部分的に堅きが残っている。壁は褐色を呈し10~15cmを測る。

カマドは北東隅に位置する。特に施設等ではなく、周囲の床面より5cm程凹めた所に狭い範囲で焼土を見る事ができる。

ピットはこのカマド南際に設けられている。床面から約20cm程掘り込まれ、なだらかな傾斜を示す。中には拳大~小児頭大の石が土器とともにある。

遺物には土器、土製品、石器等がある。土器には土師器として皿、壺、甕、小形甕等があり、灰釉陶器には碗がある。石器には砥石、浮岩製の浮子が各1点、また破片ではあるが吹子と、器種不明の鉄器を見る事ができる。本址の所属時期は土器よりみて南地区に検出した2号住居址と同様10世紀後半~11世紀を考える。



第9図 第4号住居址

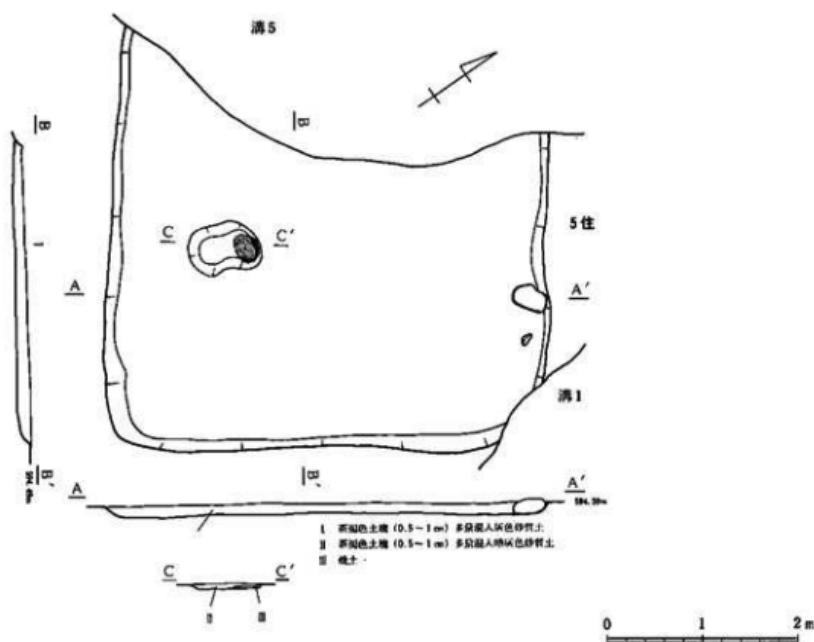
第4号住居址

本址は北地区中央やや東、第2検出面上に検出された。今回の調査で全容が捉えられた唯一の住居址で、規模は7.1×5.0m、平面形は南西隅が張る不整長方形を呈す。検出面は褐色土であるが、住居外西側は白灰色を呈していた。この土色は上層にみられた溝の氾濫とは明らかに区別されるものであり、他の何らかの影響によるものと考える。覆土は茶褐色土粒が混入した灰色土で、東壁際と南壁際には黄灰色土の堆積もみられる。壁は高くやや急に立ち上がっており、北東隅ではこぶし大程度の自然石が壁から床になだれ落ちたような状況で検出され、その数は40個前後である。床面は平坦で部分的に小砂利が土中に見える。非常に堅く鉄分が沈澱し茶褐色を呈している。

炉は旧炉と新炉の2つが存在する。旧炉は西側2個のピット中間に位置し48×42×15cmの掘方の中に胴下半を欠いた甕が正位で埋設されており、その上に貼床が施されていた。一方新炉は東側の2個のピット中間やや内部側に位置する48×48×14cmの掘方の中に底部のある壺が正位で埋設されていた。なお焼土は新炉の方が多くみられた。

ピットは6ヶ検出された。このうちP₁ (63×54×56cm) P₂ (72×68×52cm) P₃ (70×63×54cm) P₄ (70×66×42cm) は主柱穴で、いずれも二段底を呈しその長径は16~23cmである。又P₄を除き明瞭な柱痕跡を観察する事ができた。P₄内には石がありこれらはあたかも柱を固定するため柱穴内につめこまれたような状態を示していた。かなり小形のP₅ (15×15×17cm) とP₆ (16×15×18cm) は補助柱穴と考えられる。

遺物には土器、土製品、石器等があり、覆土上層から下層にかけて一様に分布する。土器には内外赤色塗彩された壺や、甕、台付甕、高坏等を見る事ができる。又、土製品としては勾玉、紡錘車の円盤部、石器には、磨製石鎌、砥石、研磨痕を明瞭に残す磨製石鎌の未成品と思われるもの等が出土、壁際に落ち込んだほぼ同じ大きさの礫群などを考え合わせると興味ある住居址である。なお本址の時期は出土した遺物により弥生時代後期前半と考える。



第10図 第5号住居址

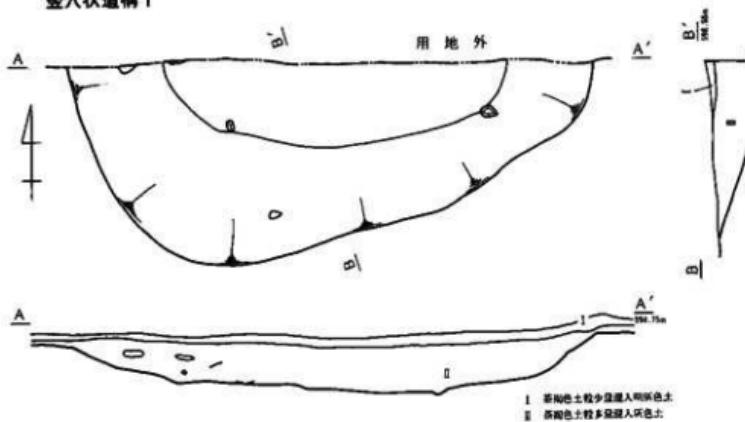
第5号住居址

南地区西側第2検出面において検出した。検出面は鉄分・マンガン分が沈澱する砂質灰色土で上部からの鉄分は覆土中においては沈澱せずに通過し、マンガン分のみがブロック状に残り周囲よりやや黒っぽくなっていた。東側は溝1（第1検出面にて検出）が本址隅を切り、又北側には未調査の大きな溝5も本址を破壊している。平面形は方形を呈するものと思われ、南西～北東まで4.5mを測る。床面は中央部のみ鉄分が沈澱してやや堅い面を見せているが周囲は覆土とほぼ同じで、若干の遺物と中央床面部を延長してそれをとらえて床面とした。壁は10～15cm程を測る。

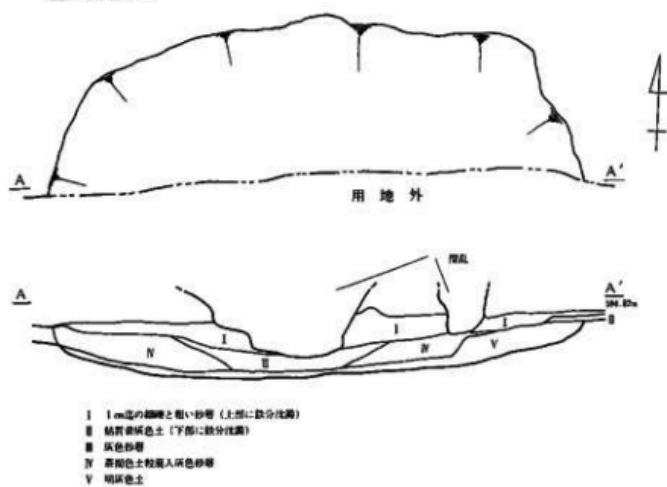
炉は住居址中央やや南西寄りに覆土より黒い土を落とす75×50×6cmの瓢箪形のピットがあり、その北東部に少量の焼土がみられこれを炉とした。

遺物は北側床面上、溝5が破壊する際にまとまって残ったような状態で出土した。土器と石器があり、土器には土師器窓、台付甕がある。これらの遺物からすると本址には古墳時代前期という時期を与える事ができる。又石器は大形粗製石匙である。混入遺物かと思われるが分らない。

豊穴状造構 1



豊穴状造構 2



0 1 2 m

第11図 豊穴状造構 1・2

2. 穫穴状遺構・土壤・建物址

1) 穫穴状遺構

畫穴状遺構は南地区1基、北地区2基の計3基をいずれも第2検出面で確認した。畫穴状遺構（以下畫と略す）1は南地区中央に、畫2・3は北地区東に位置する。

畫1は検出面にて遺物を発見し、東西・南北に2本のトレンチを入れプランを確認した。規模は東西辺約5.2m以上、北側は調査区域外となり検出部分より方形を呈すものと推定される。深さは検出面より最大50cmと深く壁面はだらだらと立ち上がる。覆土は灰色を呈し、床面は小礫を混えた灰色土で特に堅くはない。遺物は西半に集中するが床面上からのものはごく僅かで、図示した土師器壺から見て南西に所在する5住同様古墳時代前期に属するものと考える。

畫2は南半が調査区域外となるがプランは明確に捉えられた。東西辺約5.6m以上の不整形を呈する。土層図より観察すると畫2埋没過程はV→IV→III→Iの順である。Iの最下層部分まで一部に工業廃棄物による搅乱がみられる。なお遺物は皆無で時期決定は本址下部より検出された土壤（後述）の遺物を頼るしかない。

畫3は北側が調査区域外、東は工業廃棄物による搅乱に切られ規模・平面形は不明である。検出面から床面までは約10cmと浅く、東壁沿いに幅50~90cmの溝をもっている。西側では溝が終る様相を示すが東は搅乱のため不明である。深さは床面から最大20cmを測る。覆土は一様にマンガン粒を含む弱粘性灰色土で床面は灰色を呈す。畫3は畫1・2とは様相を異にし、溝中に遺物が集中するが方形周溝墓の可能性も考えねばなるまい。全体を確認できなかったのは残念である。遺物はかなり多く土師器の器台、壺の他に弥生時代の赤色塗彩を施された高杯、壺、甕などを見ることができ。量的に後者の方が大半を占めており、これらの遺物からは西側に検出した4住同様弥生時代後期前半の時期を与える事が妥当であろう。また土器の他に土製品として紡錘車の円盤部があった。

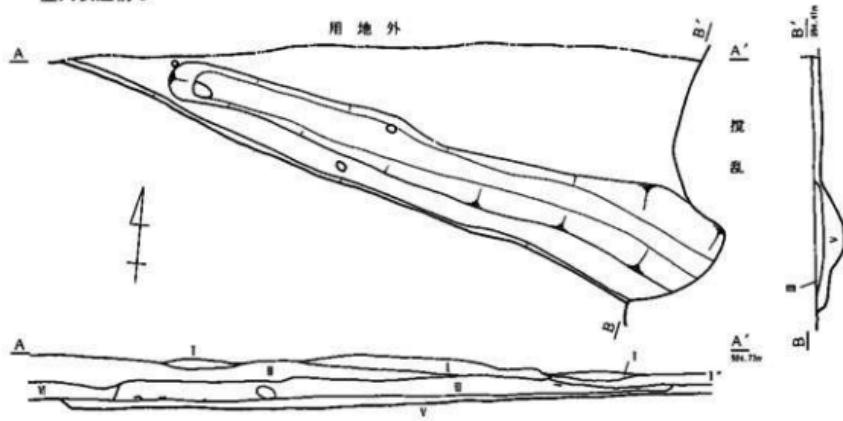
2) 土壤

土壤は南・北地区とも第1検出面には見られず、北地区第2検出面東の畫穴状遺構2下で唯1基を確認した。規模は約105×65cm、覆土はマンガン粒を多量に含む灰色土で、弥生時代の土器の一部が口縁を下に逆位で覆土中より出土した。

3) 建物址

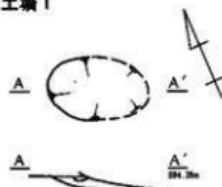
建物址は1棟のみで規模は1.3×1.1mと小型で柱穴も径15cm前後の円形である。周辺を精査したが柱穴を3ヶしか検出できず、その底は堅くもなく不明瞭だった。同検出面上には5住と畫1という古墳時代前期の遺構があるが、遺物も皆無で時期決定はできない。

豎穴状造構 3



I: 0.5cmの細理混入砂礫層 (鉄分沈澱)
 I': 1.0cmの細理層
 II: 砂層 (鉄分沈澱)
 III: 黄褐色土粒多且混入鉄分褐色土
 IV: 黄褐色土粒少且混入鉄分褐色土
 V: 黄褐色土粒少且混入鉄分褐色土

土壤 I



建物址 1



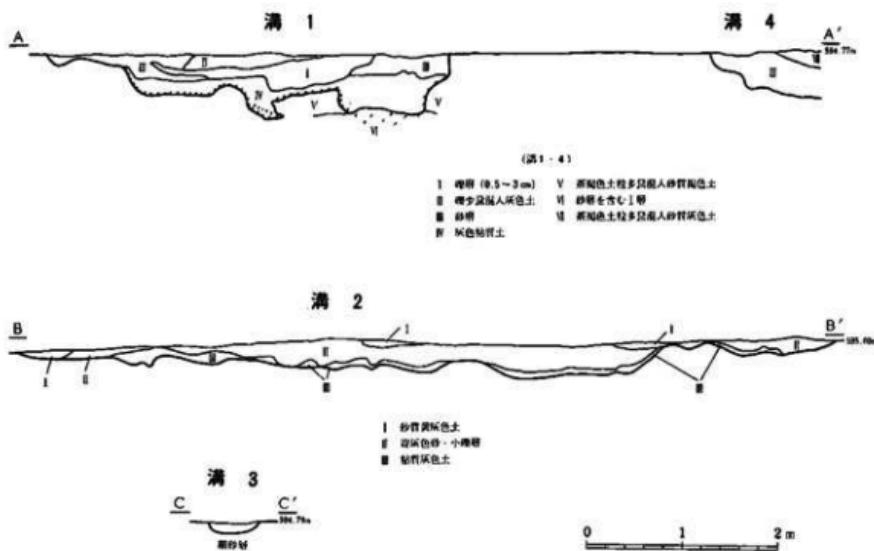
黄褐色土粒多且混入鉄分褐色土



黄褐色土粒少且混入鉄分褐色土

0 1 2m

第12図 豊穴状造構 3・建物址・土壤



第13図 溝 1・2・3・4

3. 溝

今回検出面において調査できた溝は4本である。このうち1は南地区第1検出面以前、中世遺物を得たレベルからすでにその存在が分かり、第2検出面迄もその影響を及ぼしている。2は北地区第1検出面上に見ることができるが第2検出面にてはほとんどその痕跡が分らない。この両者は概ねN-60°-Eの方向を示し同一のものとなろう。又4は1の西側にありその中の壁は1とほぼ同じ様相を呈する。調査地区内では1よりやや北側へ方向を振るが大きく氾濫した流路の下部が1と4になっていると考えれば理解できよう。これら自然流に対して3は人為的な水路と考える。4m程しか検出できなかったが幅は約50~60cmと安定し断面は浅いU字形を呈す。覆土は細砂層で方向はN-59°-Eを示す。遺物はなく上記流路に切られる。また南地区第2検出面西端に5号住居址を切る溝5がある。時間的制約のため未調査となってしまったが、覆土はやや粘質の灰色土で流底は5号住居址床面よりかなり低い。この他にも南北地区で第1検出面まで下げる間にいくつかの流路を見る事ができる。いずれも砂、或いは礫を伴っており1・2・4を含めこれらの溝より遺物は得てない。然るにこれらは自然流路で中世以降田川の氾濫による結果と考える。

(注1) 第2の第2辺2を参照

第3節 遺物

1. 土器

弥生土器、古墳時代の土器および平安時代の土器が多量に出土し、これに若干の縄文土器と中世の陶磁器が伴っていた。図示できたもの107点、拓影54点である。

(1) 弥生土器 (1~27・94・95・108~161)

第4号住居址、竪穴状造構3から主体的に出土し、他の造構と検出面から若干のものが得られている。器種に高环、壺、甕、台付甕がみられる。いずれも器種毎に器形と文様に共通点があり時期的な隔りが少ないと考えられるので一括して扱い、図示したものを中心概観してみたい。

高环：器肉の厚いもので、成形時の环部と脚の接合痕が明瞭にわかる。調整はハケメ、ヘラナデの後、粗いヘラミガキをされるだけである。17には外面に赤色塗彩が施されている。

壺：器形では、口縁部形態に着目すると、素直に外反していき、端部に至って僅かに内湾するもの(3・19・20)、大きく外反した後、端部が内湾して立ち上がるもの(2)、開き方が前2者に比して少なく(即ち頸部のくびれ具合が少ない)端部が内側へ屈曲するもの(23)、の3種がみられる。文様では頸部の横位文様帶に3類型があるようだ。A類は、等間隔止め簾状文を右回りに施文するもの、B類は横走沈線を間隔をあけて3本引き、その間にヘラ描き斜行沈線に似せた斜位の櫛描短線文で埋めているもの、C類は櫛描横線文を巡らし、それをヘラ描状の太い沈線ではば等間隔に縱に切るもの、である。これらの文様帶の上部は口縁端近くまでは無文、下部は、無文、櫛描波状文、斜行短線文、円弧文等になる。ただし先に器形の第3種に挙げたものはこの文様の類型と異なるようだ。

甕：大きくみて有文のものと無文のものに分けられる。文様のあるものは、基本的には櫛描波状文を巡らせており、波状文のある部分が頸部に限られる(21)か、更にその上下に拡がる(5・25・26)か、または斜行短線文と組み合わさる(24・146)の3類型がみられる。これらの器形は全形を知り得るものが1点しかないが、口縁部の形態に、大きく受け口状をなすもの(22・141)僅かに受け口状を呈するもの(21・24・116・138)外反するだけのもの(5・25・26・114・115)の3類型がある。無文のものは第4号住居址から集中的に出土していく(6・7・8)、胎土からみてたぶん9・10・13)口縁部は受け口になるものと外反するものの2種があるが、いずれも器肉が厚く、頸部のくびれと胴部の張りが強い特徴的な器形をもっている。

台付甕：口縁部1点(14)脚部2点(15・16)。14は薄手で、内側へ屈曲する口縁端部の外側の稜にヘラによるものとみられる刻みがつけられている。脚部は上下で方向の異なるハケメを施され、端部はヨコナテがなされる。

以上の弥生土器の特徴を列挙してみる。①壺・甕とともに受け口状口縁と、単に外反する口縁がみ

られるが前者の比率の方が多い、後者についても、短く外反、あるいは大きくラッパ状に外反、という形態ではない。②櫛描短線文の多用。③櫛描彫状文が甕に少なく壺に多い。またいずれも等間隔止め。④壺の3類型の頸部文様帶。⑤縄文地文や口唇の縄文、刻み等が全くみられない。

これらから簡単に地域・時期的な事項について考えてみる。まず受け口状口縁は中期末百瀬式の影響と考えることができる。その上で、縄文や太い棒状工具による沈線がみられない点は百瀬式より新しいことを示している。また壺頸部に3本の横走沈線を引き、その間を斜行沈線で埋める手法は東北信地方の吉田式にみられるものであり、本例もそれを模している可能性がある。一方、櫛描短線文は主に天竜川水系に分布する手法とされている。これらを総合すると、今回出土の弥生土器は東北信と天竜川水系の双方から影響を受けた。弥生後期前半の土器群と捉えてよいと考える。ただし、118, 131は、甕の縦羽状条線の一部で中期に遡り、150は後期後半に下る可能性がある。

(2) 古墳時代の土器 (28~37・96)

第5号住居址、竪穴状遺構1その他から出土している。壺、甕、台付甕、器台がみられる。甕は球形の胴部から「く」の字状に口縁部が外反する形態で、ハケメ調整される。他は全形を知り得ない。器台の中に胎土からみて東海地方から将来されたとみられるもの(96)がある。

(3) 平安時代の土器 (38~93・97~101・103・10)

第1~3号住居址、検出面から出土している。第1号住居址の組成は内黒土師器の食器類を中心となり糸切りの須恵器坏が伴う。第2・3号住居址の組成はこれと異なり端部をつまみ上げた皿、大小の坏、深い灰釉碗が中心となっている。前者が9C後半~10C前、他が11C代と推定する。

2. 鉄器

今回出土した鉄器およびこれに関する類のものは11点あり、内訳は鉄器9点、鉄滓2点である。全体に腐蝕が進んでおり類別できたのは刀・刀子・鋤頭の3種4点である。以下不明品を含め個々について見て行く。

刀は2点あり共に南地区第1検出面からの出土である。1は刃部の一部を欠損しており、背部は腐節によりかなり肥大している。刃部の長さは22cm程度と推定され、背がやや湾曲しているものと思われる。茎と身の区別ははっきりしている。2は腐蝕が激しいのに加え両端を欠損しているため形状は定かでないが、身の厚さは1と同程度であろう。背はほぼ真直ぐと思われる。

6は刀子で身の一部を欠損しており茎より身へ段を成し刃部を設けているものと思われる。全長は10cm前後と推定する。

5は鋤頭の一部である。13cm程の真直ぐな部分のみであり腐蝕が著しく中心部に隙が入っている。身の厚さは1.8cm前後、木質部装着部の凹状部分の深さは1cm程であろうか。

上記の他不明品5点がある。4は片端が欠損しており腐蝕もかなり進んでいて中間部が張り出している。欠損箇所に三角形状の断面が観察され曲がりかけている状態から鏃かと思われる。穂先

部分？を欠損しているため詳細は不明である。3は端部に折り返した部分があり平鎌によく似た形状を示しているがやや大きめである。中心部分は鬆が入り、背部は腐蝕によりかなり肥大しており湾曲の度合ははっきりしない。8は9mm程の緩やかな四角い断面を持つ棒状で先端7mm程が直角に折れ曲がっている。その径は5mm程で他端も同程度の太さとなり欠損しているものかと思われる。胴部に棱らしきものが見えるところから腐蝕して肥大した鎌であろうか。7は2mm前後と非常に薄い板状を呈している。腐蝕が進み剥落箇所がみられる。

3. 土製品・石器

土製品は3種4点である。

2は勾玉の模造品である。短かく棒状にした粘土を曲げて孔は片側から貫通させたため、片側に粘土カスが残る。全体に指で調整した痕跡が残り稚拙なつくりである。3・4は紡錘車の円盤部である。いずれも軸孔より半分、或いは四半分に割れている。手づくりのままの3に比べ4は表裏、外周面を丁寧につくり上げている。

石器類は6種77点ある。

磨製石鎌は3点である。いずれも粘板岩を用いた凹基底で無孔（5）のものと有孔（6・7）がある。5は細長く大形で縁辺は鋸歯状を呈する。6は表裏の凹みに点々と赤色顔料が残り、当初は全体塗装されていたことを示す。又基部には穿孔した痕跡が残り（矢印部分）その不均衡なプロポーションから破損後に再加工したものとも考えられる。7は先端部が小さく突出している。これら3点とも尖端部や片脚端部を欠くがその程度は小である。

8～15は長さが37～62mm、重量は4.02～8.88g のものである。使用痕を探したのであるが、石包丁にみられるような縁辺に添った光沢は見当らず、小形のため、これらを磨製石鎌の未完成として扱かった。このうち8、9はともに激しく両面を研磨されており、10の片面にも同じような研磨痕が見えている。石質は粘板岩・砂岩・玢岩からチャートまで多種にわたる。

16は大形石匙である。上端に自然面を残し肩部はゆるやかに張る。刃部は肩部より下すべてと思われるが、風化がすんでおり明確ではない。

17～19は砥石である。いずれも砂岩製で、17・19を見ると概ね6面体でそのすべてが使用されている事が分かる。また20も砥石であるが17～19よりきめの細かな粘土質岩である。平滑面が広く断面V字状の数条の線条砥痕を見る事ができる。対象物が鋭い鉄のためであろう。

21は浮岩（軽石）製の浮子である。一つの大きな穴を穿った後、斜めにもう一つ小さめの穴を開け大きな穴と結ばせている。

鉄器一覧表

出 土 地 点	種 別	法 量				備 考	図 No.
		長さ mm	幅・高さ mm	厚さ mm	重量 g		
2 住	不 明	61	61	2	5.61	板 状	7
。	鐵 洋	34	9(5)	9(5)	4.91 47.27	鏽か L字状、片端欠損か、()内は先端部の寸法	8
3 住	明 洋	34	9(5)	9(5)	4.91	一部、頭は身の頭を記した	5
南地区第1検出面	頭	(132)	45	24	(177.04)	刃部の一部欠損	2
*	刀	283	36	8	(212.42)	両端欠損、腐蝕顯著	1
*	刀	か (140)	(32)	7	(113.90)	鏽か、片端欠損	4
*	刀	明 (123)	(23)	9	(22.56)	身の一部欠損	6
*	刀	子 (63)	10	6	(7.77)	鏽か、先半欠損	3
*	刀	不 明 (132)	(49)	10	(136.41)	棒状、片端欠損	9
*	不 明	61	12	—	18.31		
*	鐵 洋				177.04		

土製品一覧表

出 土 地 点	品 名	法 量				備 考	図 No.
		長さ mm	最大径 mm	孔径 mm	厚さ mm		
3 住	報 玉	(65)	(5.5~6.0)	(12)	20	(47.92) 寸法は復元値	1
4 住	勾 紙 車	31	24(輪)	1.5×3	10	5.44	2
*	紺 紙 車	—	(53)	(8)	10	(8.37) 寸法は復元値	3
翌 3	紺 紙 車	—	(57)	(7)	11	(19.16)	4

石器・石製品一覧表

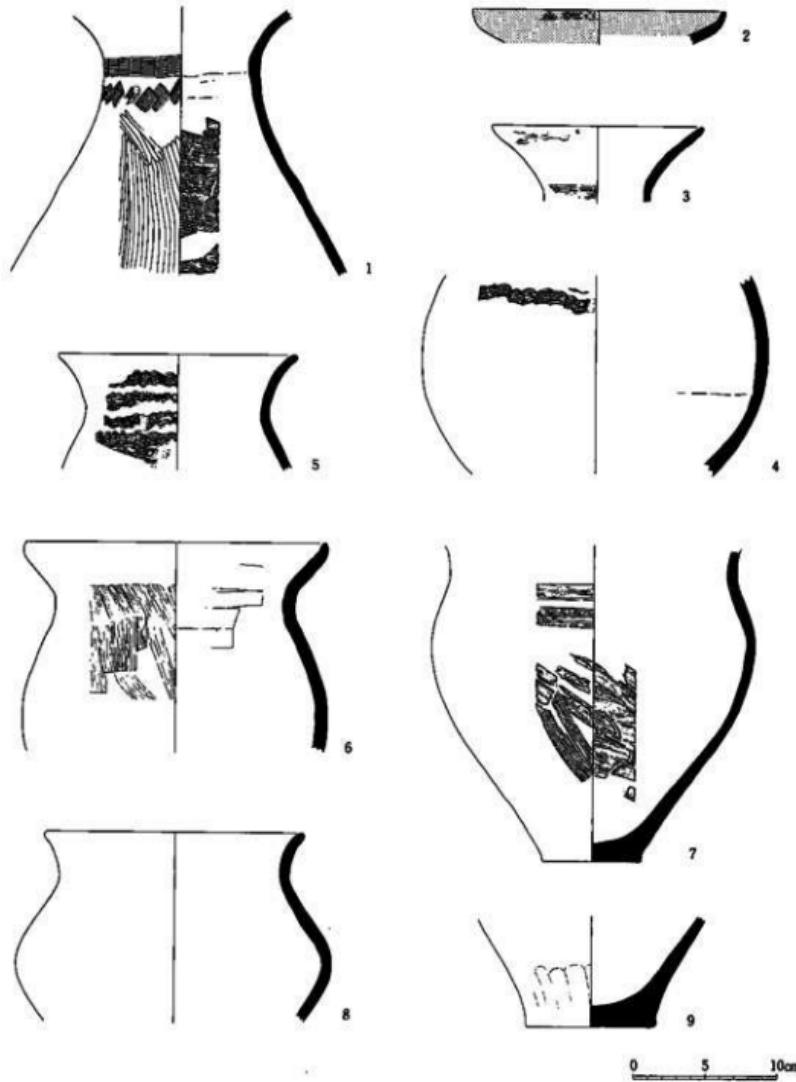
出土地点	品 名	法 量				石 質	備 考	図 No.
		長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g			
3 住	砥 石	75	79	56	336	粘 土 質 岩		20
*	浮 子	110	102	55	162	浮 岩		21
4 住	磨 製 石 磨	59	22	3	3.93	粘 板 岩		5
*	有孔 磨 製 石 磨	34	(22)	3	(1.39)	粘 板 岩	孔径1.5mm、塗彩痕跡あり	6
*	有孔 打 製 石 磨	28	(37)	3	(2.29)	粘 板 岩	孔径2.5mm	7
*	磨 製 石 磨 未成品	37	23	4	4.02	砂 岩	両面研磨痕あり	8
*	磨 製 石 磨 未成品	53	23	4	5.69	チ ャ ト ブ ロ 岩	両面研磨痕あり	9
*	磨 製 石 磨 未成品	52	28	6	4.84	粘 板 岩	片面一部研磨痕あり	10
*	磨 製 石 磨 未成品	49	28	4	8.88	細 粒 砂 岩		11
*	磨 製 石 磨 未成品	62	25	5	7.40	千 扇 岩		12
*	磨 製 石 磨 未成品	49	27	4	8.45	ホルンフェルス	(砂 岩)	13
*	磨 製 石 磨 未成品	62	23	3	5.90	ホルンフェルス	(砂 岩)	14
*	磨 製 石 磨 未成品	46	20	4	4.32	チ ャ ト ブ ロ 岩		15
*	砥 石	68	28	10	32.83	砂 岩	紙面6	17
*	砥 石	63	34	19	60.19	砂 岩	紙面4	18
5 住	打 製 石 磨	88	48	11	56.16	ホルンフェルス	(砂 岩)	16
北地区第2検出面	砥 石	69	24	12	30.32	砂 岩	紙面4	19

土器觀察表

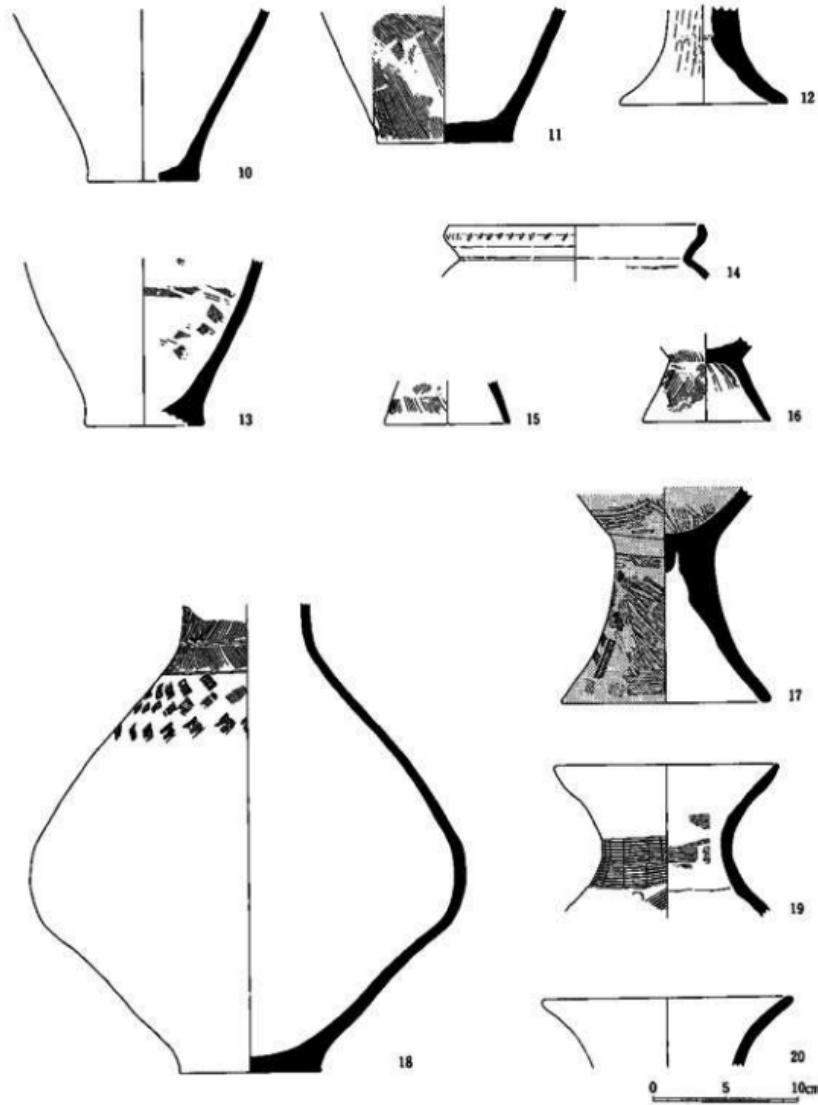
No.	出土地点	地	形	口徑	底	寸 法 (cm)	外 面			内 面			板 形・圓 盤・形 狀の特 徴			圖 考
							斜面	口沿	底	斜面	口沿	底	(文) 動植物紋文或螺旋文 (同) 外: ナガ, 縫: ガキ, 内: ナガ, 縫: ハナ			
1	4 住	井生	盤	-	-	17.5	1/7	縫一跡	縫	1/7	縫	縫	(文) 動植物紋文或螺旋文 (同) 外: ナガ, 縫: ガキ, 内: ナガ, 縫: ハナ	内外赤色磨光		
2	-	-	-	-	-	14.6	1/6	波	波	1/6	波	波	(文) 動植物紋文 (同) 螺旋形			
3	-	-	盤	-	-	-	16.4	1/6	波	波	1/6	波	(文) 動植物紋文・螺旋形或螺旋狀文 (同) 螺旋形			
4	-	-	-	-	-	-	20.8	1/6	波	波	1/6	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
5	-	-	-	-	-	-	17.6	1/6	波	波	1/6	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
6	-	-	-	-	-	-	8.9	1/2	波	波	1/2	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
7	-	-	-	-	-	-	7.5	1/1	波	波	1/1	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
8	-	-	-	-	-	-	9.4	4/3	波	波	4/3	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
9	-	-	-	-	-	-	11.5	1/2	波	波	1/2	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
10	-	-	-	-	-	-	21.5	1/6	波	波	1/6	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
11	-	-	-	-	-	-	8.1	1/3	波	波	1/3	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
12	-	-	-	-	-	-	17.6	1/6	波	波	1/6	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
13	-	-	盤	-	-	-	8.6	1/6	波	波	1/6	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
14	-	-	台付盤	-	-	-	8.7	1/6	波	波	1/6	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
15	-	-	台付盤	-	-	-	8.7	1/6	波	波	1/6	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
16	-	-	高	16	-	12.9	1/6	波	波	1/6	波	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
17	奥	3	高	-	-	-	9.8	1/1	波	波	1/1	波	(文) 動植物紋文 (同) 外: ヨコナガ, ハナ	外輪外縫合外縫合		
18	-	-	高	-	-	-	15.2	1/4	波	波	1/4	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
19	-	-	高	-	-	-	16.9	1/2	波	波	1/2	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
20	-	-	高	-	-	-	20.2	6.6	25.7	7/8	波	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
21	-	-	高	-	-	-	25.1	3/7	波	波	3/7	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
22	-	-	高	-	-	-	15.6	1/2	波	波	1/2	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
23	-	-	高	-	-	-	17.0	1/2	波	波	1/2	波	(文) 動植物紋文・螺旋形或螺旋狀文 (同) 外: ハナ, 内: ナガ			
24	-	-	高	-	-	-	13.9	1/7	波	波	1/7	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
25	-	-	高	-	-	-	22.8	1/2	波	波	1/2	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
26	-	-	台付盤	-	-	-	9.3	1/1	波	波	1/1	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
27	-	-	土附盤	8.7	-	8.4	1/6	波	波	1/6	波	波	(文) 動植物紋文 (同) ナガ			
28	-	-	高	-	-	-	12.0	1/6	波	波	1/6	波	波	外輪外縫合		
29	-	-	高	-	-	-	16.4	1/2	波	波	1/2	波	波	ハナ, ナガ		
30	-	-	高	-	-	-	14.6	1/7	波	波	1/7	波	波	外: 日の輪(ハナ), 内: 赤か(ハナ), ナガ, 直縫合		
31	5 住	井	盤	-	-	-	12.4	7.5	16.0	2/5	波	波	波	外: ハナ, ナガ, 直縫合		
32	-	-	台付盤	-	-	-	9.0	1/5	波	波	1/5	波	波	外: ハナ, ナガ, ハナ		
33	-	-	台付盤	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	外: 輪(ハナ)		
34	-	-	高	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
35	-	-	高	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		

No.	底土地元	種別	形	台付型	口径	底径	寸法(cm)	特徴	成形・開量・形状の特徴				備考
									外	内	面	面	
36	5 住	土師器	壺	21.7	6.4		1/7	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	ヨコナゲ 外：ハケナゲ、内：瓶ナゲ。口唇上端に縫
37	37 住	+	壺	6.8		5.6	1/6	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	ロクロナゲ
38	38 1 住	+	壺	11.8		5.6	4.0	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
39	39 *	+	壺	5.8		5.8	6.5	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
40	40 *	+	壺	17.8		8.8	6.5	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
41	41 *	+	壺	13.0		6.0	3.8	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
42	42 *	+	壺	6.0		6.0	(2.8)	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
43	43 *	+	壺	6.0		6.0	(2.8)	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
44	44 *	+	壺	6.2		6.2	(2.8)	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
45	45 *	+	壺	13.5		7.5	5.3	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
46	46 *	+	壺	13.2		5.5	3.8	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
47	47 *	16 76	瓶	14.6		6.2	4.6	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
48	48 *	+	壺	10.4				外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
49	49 *	+	壺	7.5				外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
50	50 *	+	壺	25.0		11.0	32.5	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
51	51 *	+	壺	-		3.5	(3.0)	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
52	52 *	+	壺	-		21.0		外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
53	53 *	+	壺	-		25.9		外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
54	54 2 住	+	壺	9.5		4.5	1.4	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
55	55 *	+	壺	6.4		3.8	1.5	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
56	56 *	+	壺	9.4		4.6	1.6	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
57	57 *	+	壺	8.8		4.8	1.1	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
58	58 *	+	壺	8.4		4.4	1.4	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
59	59 *	+	壺	9.2		4.5	1.2	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
60	60 *	+	壺	10.4				外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
61	61 *	+	壺	9.4		5.0	2.5	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
62	62 *	+	壺	9.6		4.9	2.3	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
63	63 *	+	壺	8.8		4.1	2.1	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
64	64 *	+	壺	9.3		5.6	2.0	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
65	65 *	+	壺	9.2		4.9	2.3	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
66	66 *	+	壺	9.4		4.4	2.5	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
67	67 *	+	壺	9.6		3.8	2.3	外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
68	68 *	+	壺	14.6				外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
69	69 *	+	壺	16.4				外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
70	70 *	+	壺	21.8				外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張
71	71 *	+	壺	15.2				外：直、内：斜	丸	丸	丸	丸	内張

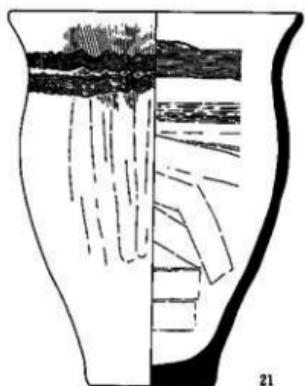
No.	底土地點	相 隔 距 離	形 狀	寸 法(cm)	口 徑	底 徑	四 周	成形・調整・影響の特徴				底 土 名
								外 面	内 面	横切 面(口 径)	横切 面(底 径)	
72	3 住	土壤5	井	31.0	8.0			1/15 (元)	規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
73	73	*	通路5	*	*	13.5	7.4	5.9	1/2 規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
74	74	*	灰 植	*	*	15.2		1/8 (2/3)	規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
75	75	*	灰 植	*	*	8.2		1/8 (1/3)	規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
76	76	*	灰 植	*	*	6.4		1/8 (1/4)	規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
77	77	*	灰 植	*	*	7.2		1/8 (1/4)	規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
78	78	*	灰 植	*	*	7.0		1/8 (1/4)	規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
79	79	*	灰 植	*	*	10.1	4.8	2.0	2/5 規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
80	81	3 住	土壤5	井	16	9.5	4.4	2.6	2/5 規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
81	82	*	灰 植	*	*	8.7	4.5	2.2	5/6 規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
83	83	*	灰 植	*	*	9.7	4.2	2.3	3/5 規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
84	84	*	灰 植	*	*	9.9	3.5	2.0	3/5 規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
85	85	*	灰 植	*	*	13.0	4.3	6.3	1/2 規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
86	87	*	灰 植	*	*	17.0		1/8 (2/3)	規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
88	88	*	灰 植	*	*	14.5	6.6	6.3	1/5 (元)	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
89	89	*	灰 植	*	*	12.8	5.2	6.2	1/5 (元)	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
90	90	*	灰 植	*	*	13.5		6.6	1/5 (元)	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
91	91	*	土壤5	管	10.4	10.2	4.2	4/5 規 則 形	規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
92	92	*	小樹籬	*	*	18.7		6.0	1/1 規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
93	93	*	管	*	*	11.6		7.9	1/6 規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
94	94	北 2 檐	管 牛	*	*			1/1 規 則 形	規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
95	95	南 1 檐	管	*	*	11.4		1/6 (元)	規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
96	96	*	土壤5	管		13.6	5.8	4.1	1/4 規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
97	97	2 檐	*	*	*	15.6		1/7 規 則 形	規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
98	98	*	田	*	*	9.0	4.6	2.0	1/3 規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
99	99	*	小樹籬	*	*	4.6		1/2 (元)	規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
100	100	北 2 檐	管	*	*	6.6		1/2 (元)	規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
101	101	北 1 檐	土壤5	*	*	21.6		8.6	3/5 (元)	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
102	102	2 檐	*	*	*	7.8		4.6	1/2 規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
103	103	南 2 檐	管	*	*	10.8	6.0	1.9	1/2 規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
104	104	南 2 檐	管	*	*	19.6			1/10 規 則 形	規 則 形	規 則 形	ロクロナ
105	105	2 檐	管	*	*							ロクロナ
106	106	南 1 檐	管	*	*							ロクロナ
107	107	南 2 檐	管	*	*							ロクロナ



第14図 土器実測図 (1)



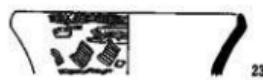
第15図 土器実測図 (2)



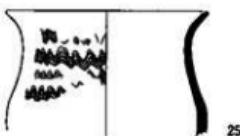
21



22



23



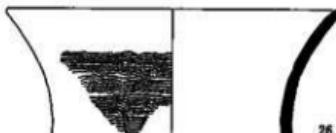
25



24



27



26



28



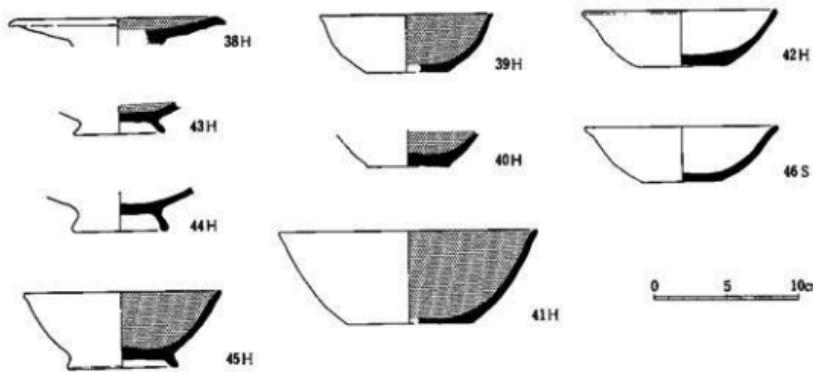
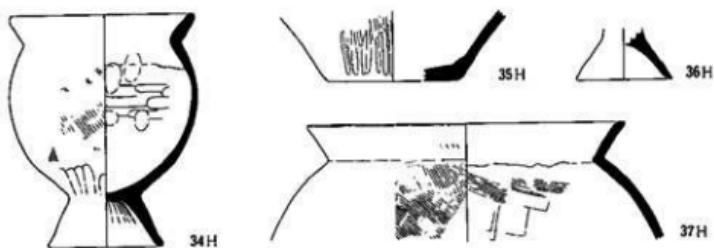
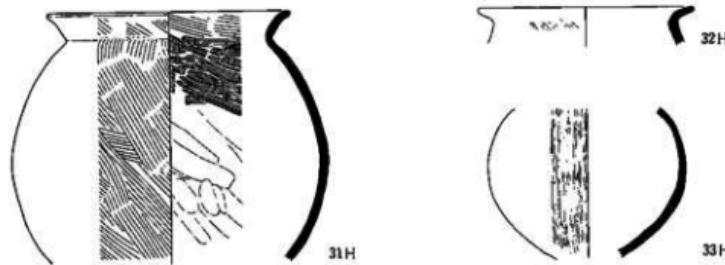
29



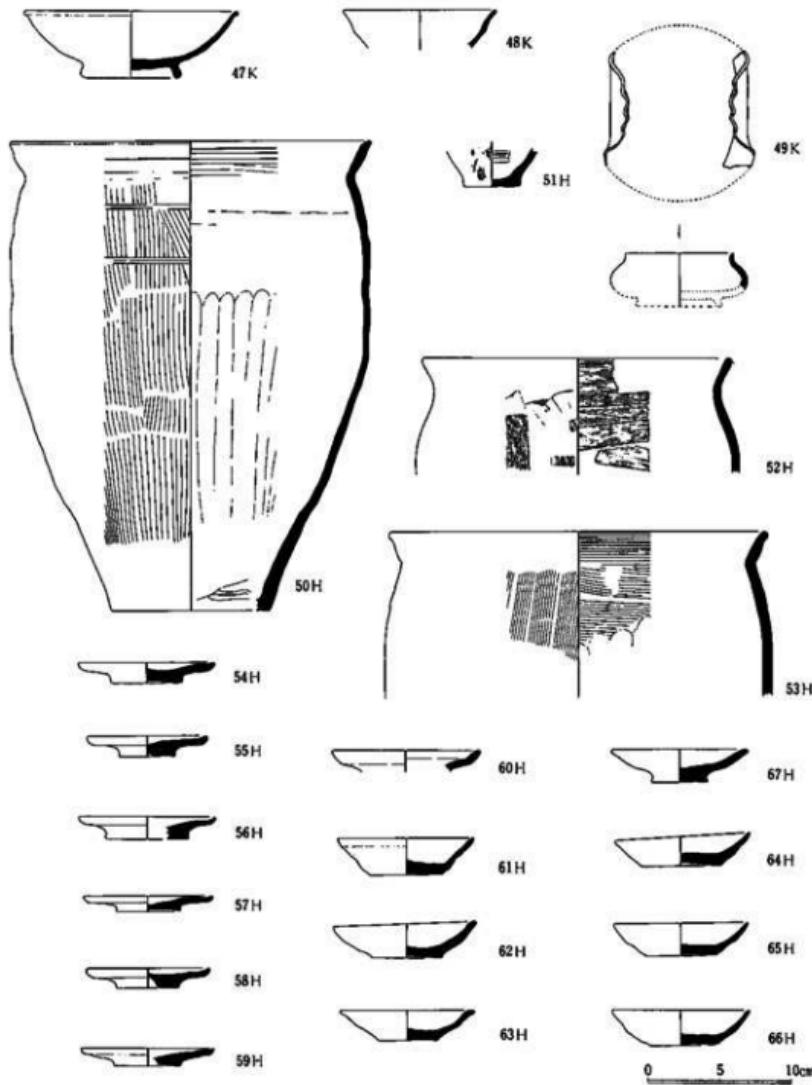
30

0 5 10cm

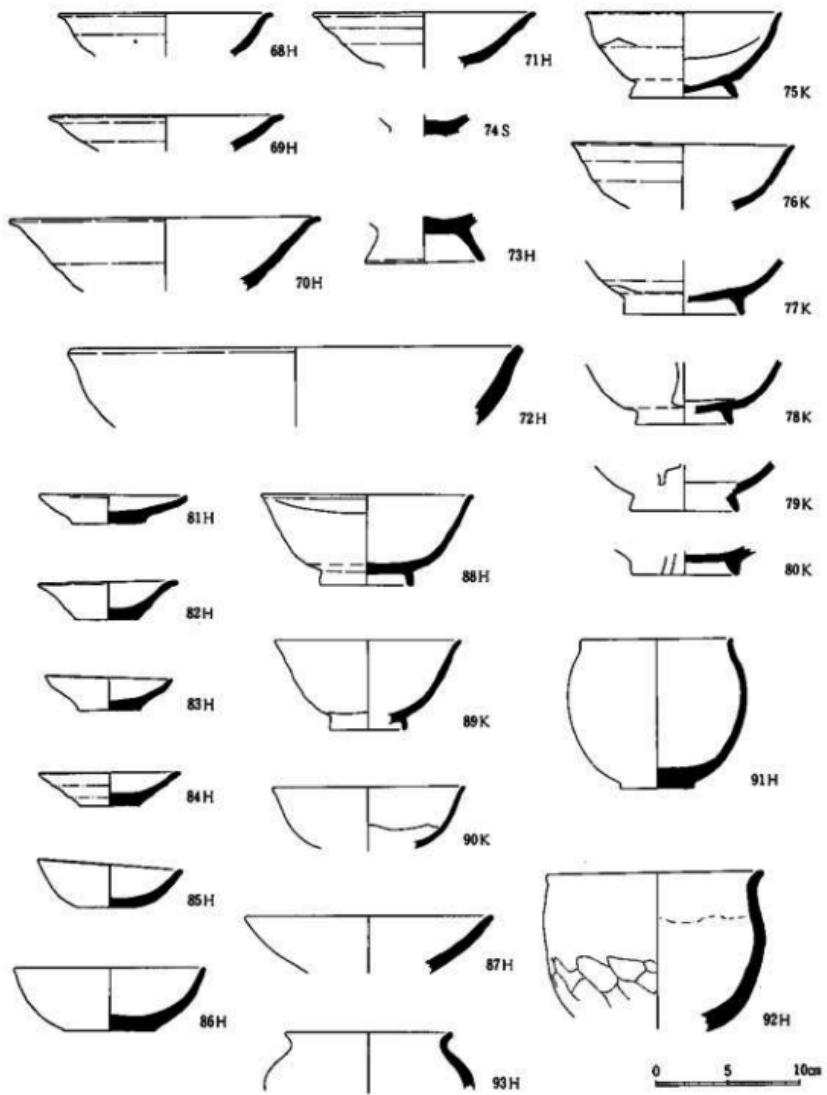
第16図 土器実測図 (3)



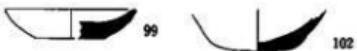
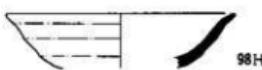
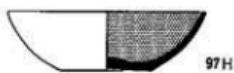
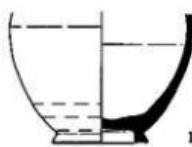
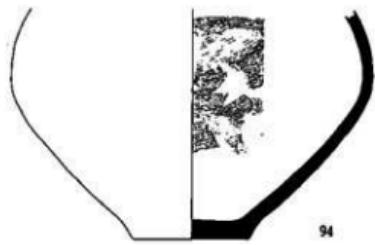
第17図 土器実測図 (4)



第18図 土器実測図 (5)



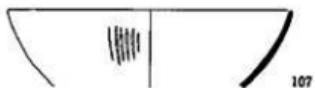
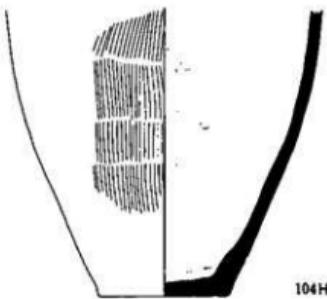
第19図 土器実測図 (6)



102

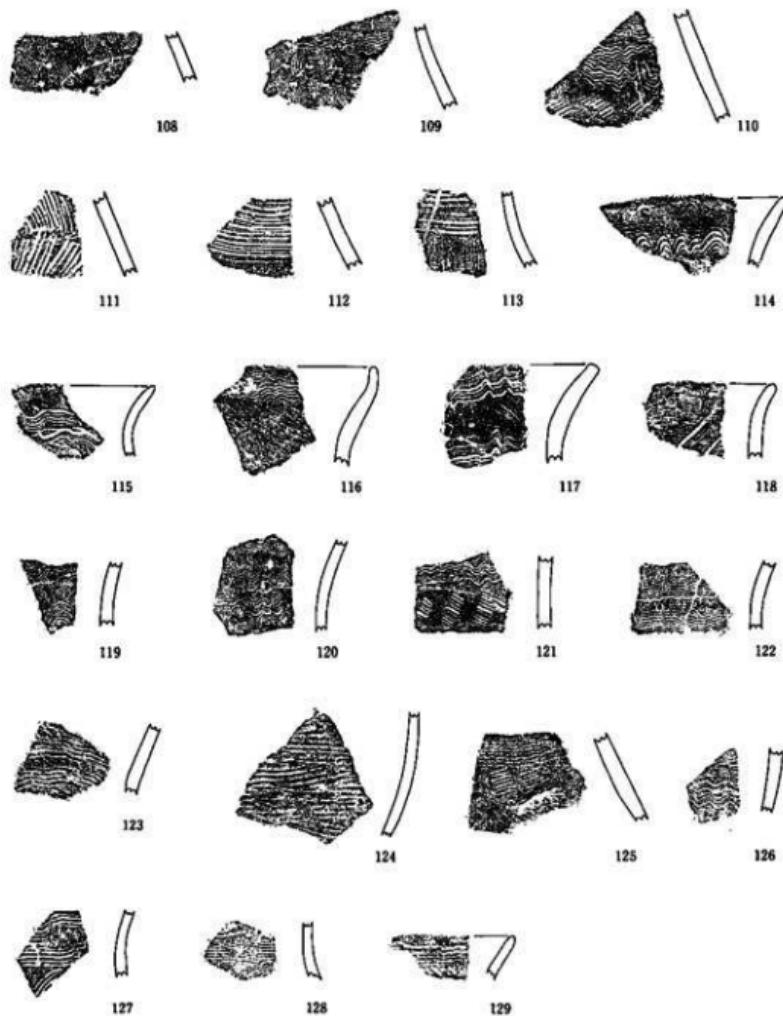
105

106

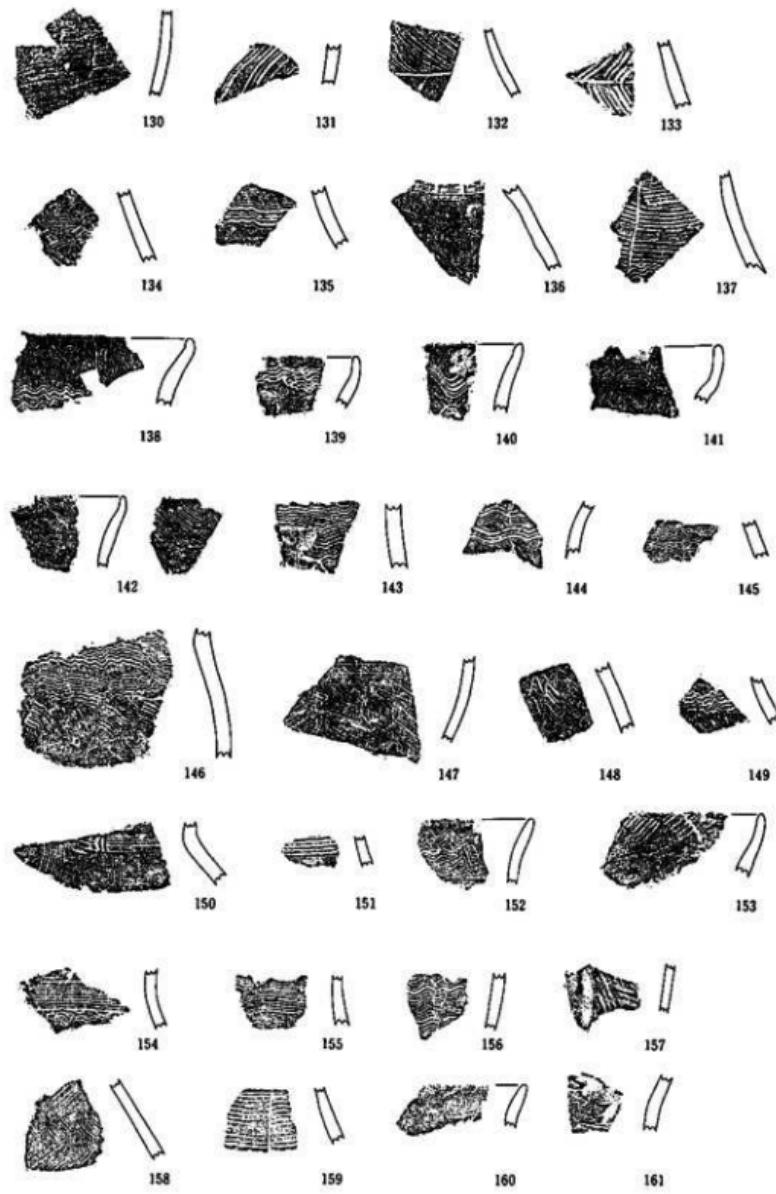


0 5 10cm

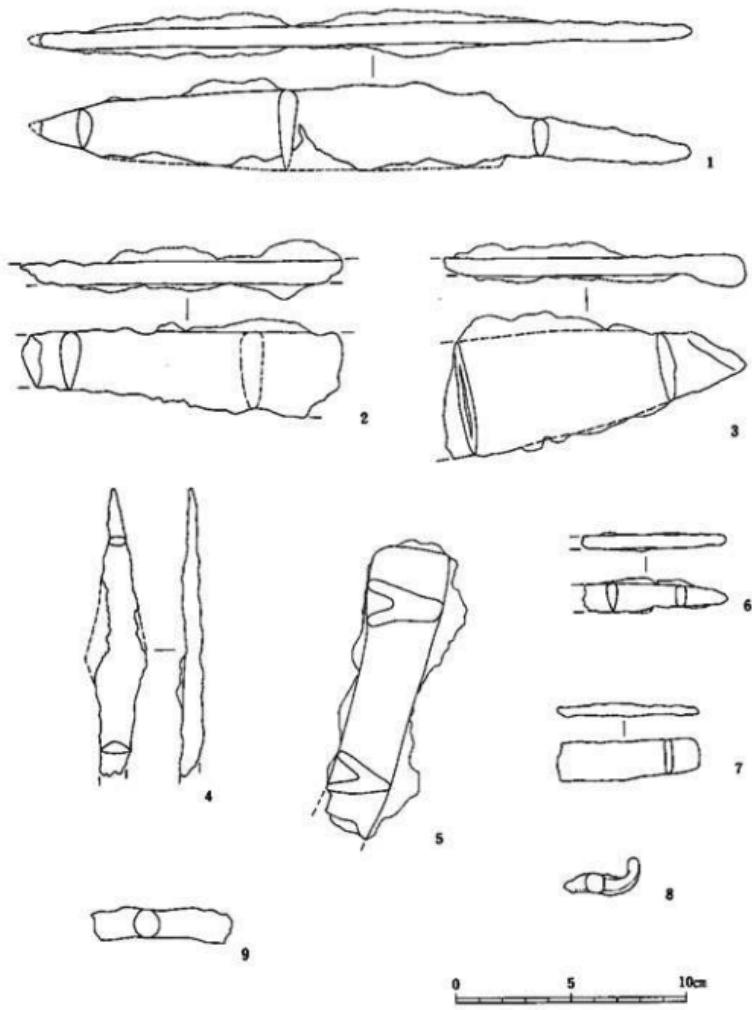
第20圖 土器実測図 (7)



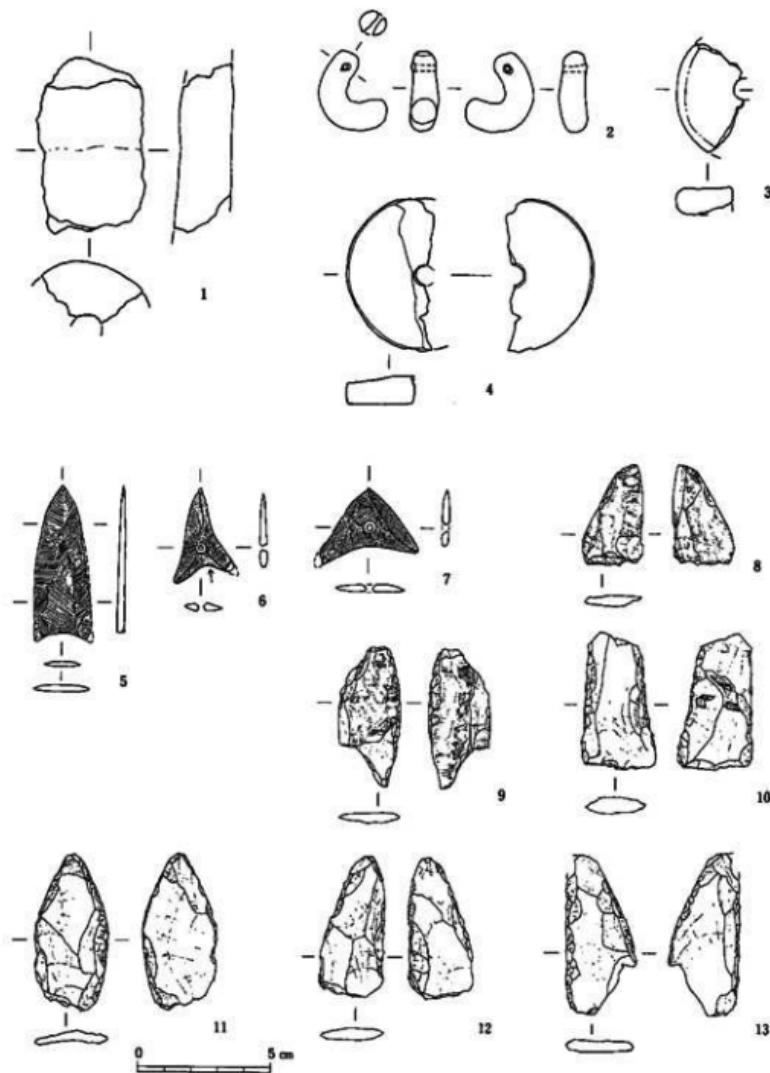
第21図 出土土器拓影 (1)



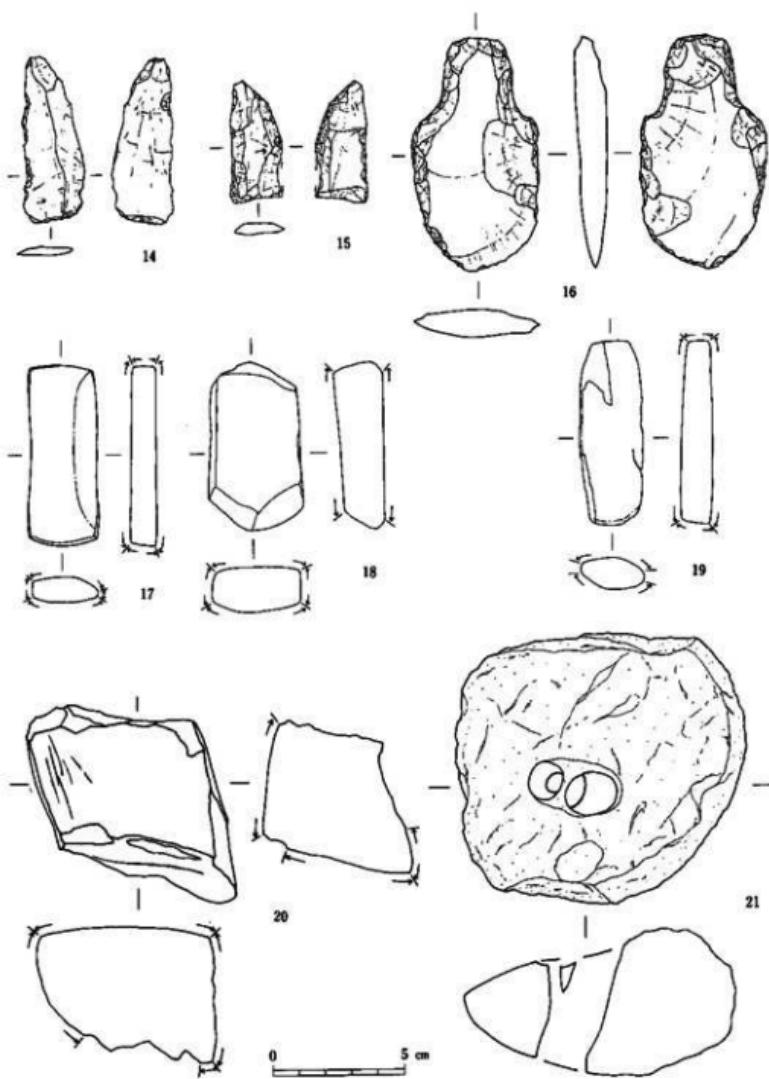
第22図 出土土器拓影 (2)



第23図 鉄 器



第24図 土製品・石器 (1)



第25図 石 器 (2)

第4章 調査のまとめ

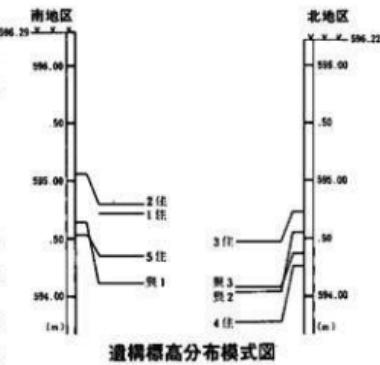
今回は市営住宅建築に伴ない南松本駅の南、マツモク工業敷地内に延べ1325m²の調査を行なった。調査地には工業廃棄物処理のための穴がいくつか設けられ、化学薬品・溶剤等が大量に埋められた場所もあった。

検出した遺構は第1検出面（平安時代）で住居址3溝4、第2検出面（弥生後期～古墳前期）で住居址2、竪穴状遺構3、土壙1、溝1である。このうち1号住居址はカマド付近よりの多量の遺物により9世紀後半の時期を与えられるが、その状況から洪水に遭い大半を流失したものであろう。また平安時代後期の3号住居址は浮子1点を出土しており、昭和60年度に調査した南松本駅北西地点での平安時代の住居址出土の土錐20個余を考慮に入れると、田川を漁場としていたものであろうと推察する。4号住居址は今回の調査で全容を明らかにできた唯一の住居址である。新・旧炉が存在し柱痕跡を残す4ヶのピットと補助柱穴2ヶをもつ。遺物では磨製石鎌3点とその未成品8点及び砥石等があり、壁際に多数見られた拳大の石などを考え合わせると小工房的な性格も考えられる。時期的には後期前半を与える。また同時期の竪穴状遺構3は方形周溝墓を思わせる様な溝の一部を確認し多くの遺物を得ている。

今回調査した第1検出面上の土層中にも何本か砂礫を含む溝が観察され、田川は平安時代以後に入っても幾度か氾濫を繰り返したことがわかる。またその層中でも若干の遺物（陶器片および鉄器等）を得ており、中世にも周辺に集落があったことを感じさせる。

なお住居址・竪穴状遺構の標高分布図を右上に掲載した。南・北両地区の間隔は約35mであり、地表面では成地が為されているためそれ程比高差を感じない。遺構掘込み面（検出面）は重機により削平したため正確ではないが、床面を考慮に入れても同時期の遺構同志にかなりの比高差がある。また当地は河川（田川）沿辺に位置するためか、他の平地に比べ短期間のうちに厚層な堆積（平安時代中期の面まで約120cm、弥生時代後期前半の面まで約200cm）をしたことがわかる。

芳川平田地区あるいは出川地区といった周辺の調査は緒についたばかりだが、今回の調査を含め弥生時代から平安時代にかけて徐々に成果をみせている。当地周辺は田川の後背湿地であったと考えられ、氾濫を避け耕作を行なうと同時に、田川を漁場とする生活が営まれていたのであろう。当地の歴史解明には今後の調査に一層期待が寄せられる。



遺構標高分布模式図

図 版



南地区
第1面検出作業



南地区
第2面検出開始



南地区
調査終了



北地区
第1面検出作業



第4号住居址
掘込み中



北地区
調査終了



第1号住居址



第1号住居址
遺物出土状況



第1号住居址
カマド



第2号住居址



第2号住居址
遗物出土状况



第2号住居址
遗物出土状况



第3号住居址
(西より)



第3号住居址
(北より)



第3号住居址
ピット
遺物出土状況



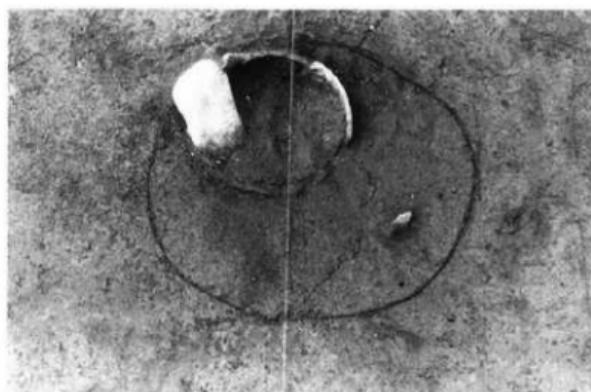
第4号住居址



第4号住居址
遺物出土状況



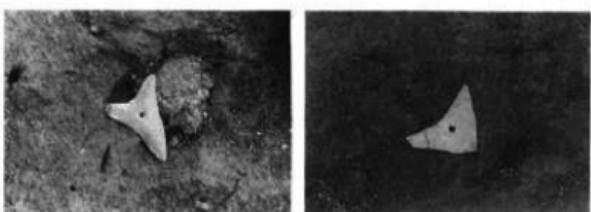
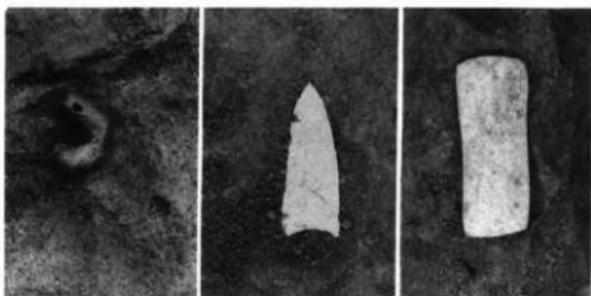
第4号住居址
北東隅縫出土状況



第4号住居址炉



第4号住居址旧炉址



第4号住居址
遗物出土状况



第5号住居址



第5号住居址
炉址



第5号住居址
遗物出土状况



豎穴状造構 1



豎穴状造構 2



豎穴状造構 3



竖穴状遗構 3
遺物出土狀況



竖穴状遗構 3
遺物出土狀況



土壤 1
遺物出土狀況



1 (4住)



7 (4住)



4 (4住)



6 (4住)



13 (4住)



17 (堅 3)



18 (堅 3)



19 (堅 3)



21 (堅 3)



22 (堅 3)



31 (5住)



34 (5住)



47 (1住)



42 (1住)



75 (2住)



62 (2住)



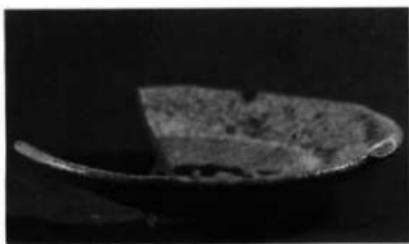
82 (3住)



92 (3住)



101



106



96



94

松本市文化財調査報告No.53

—松本市出川南遺跡—

昭和62年3月20日 印刷

昭和62年3月31日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 中信凸版印刷株式会社

橋本市出川南郷

橋本市出川南郷